
三つ葉のクローバー

青山 あびあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三つ葉のクローバー

【Nコード】

N6775U

【作者名】

青山 あぴあ

【あらすじ】

内気で人見知りの性格の女子高生千尋、優しく女の子のような外見の大学生秀太、マイペースなお嬢様の由香里。3人が音楽を通じて出会い、時間を共にするうちに互いが見えぬ形の力となって、それぞれが抱える悩みを乗り越えていく。何も特別なことばかりが幸せじゃない。日常の中に幸せを見出す物語。

序

春の大型連休が終わっても、街の中心にあるこの駅は人で溢れ返っている。

そんな人ごみの中を神崎千尋かんざきちひろは小さな体を目いっぱいに使って必死の思いで抜け、待ち合わせ場所に向かっていた。

目的地は駅前にある広場。改札を抜けたら歩いて5分とかからない。約束の時間である午前10時までにはまだ20分もあり、遅れることはまずあり得ない。

けれど、できるだけ早く着きたかった。待ち合わせ相手の到着がいっつも早いのだ。

いつもどのくらい前もって来ているのか千尋は知らない。

だが、確実に20分前には着いているだろう。千尋には確信があった。

駅の入り口を抜けると、千尋は栗色の髪をなびかせて駆けだした。

千尋が広場に着くと、小さい体で重たそうにギターケースを担いだ蒼井秀太あおいしゅうたの姿が、思った通りそこにあった。

「おはよう、待った？」

千尋が駆け寄って声をかけると、秀太は気がついて

「あ、おはよう。あれ？まだ時間じゃないよね？」

と不思議そうに答えた。

秀太にとって、待ち合わせで『待つ』というのは約束の時間が過ぎてからのことらしい。

このやりとりをかわす度千尋は不思議に感じるのだが、自分よりも他人の事を優先する秀太らしいと思う。そんな秀太の優しいところが千尋は好きだった。

そしてだからこそ、本来朝が苦手な休みの日の二度寝が何よりの喜びだった千尋でさえ、できるだけ早く待ち合わせ場所に行こうと、

自然に思えた。

「今日も晴れたね」

「そうだね、日頃の行いが良いからかな」

千尋と秀太はいわゆる男女の仲というヤツではない。

更に言えば、千尋が秀太に出会ったのは、ほんの1ヶ月ほど前のことだ。

ひとり

千尋は高校生で、この春2年生になった。

通っている学校は普通科だが、どちらかといえば勉強よりも部活動に力を入れている。

実際のところ、文武両道とは程遠い進学実績だ。

そのため生徒の9割以上が何らかの部に所属しているが、千尋はどの部にも入っていない。

より正確に言えば、1年生の1学期以降、千尋は部活動に所属していない。

以前は参加していた。入っていたのは軽音楽部。パートはボーカルだった。

その軽音楽部をたった3ヶ月で辞めてしまったのは、組んでいたバンド内の人間関係が上手くいかなかったからだ。

もともと千尋は人付き合いが得意な方ではなかった。

しかし、人が嫌いなわけではなく、自ら好き好んで孤独を望むようなタイプとは違った。

ただ、積極的にコミュニケーションをとるのが苦手で、たとえ相手から声をかけられたとしても、なかなか会話は弾まなかった。

そんな性格上どうしても「箸が転がっても……」な、お年頃の同世代達の中では浮いてしまう。

幼い頃は割と明るく、積極的な性格だったのだが。

それでも中学校までは、休み時間に他愛もない会話を交わせるようなクラスメイトが毎年何人か、いるにはいたのだ。

しかし、高校に進学してからというもの、簡単な挨拶をする相手すらいなくなってしまった。

原因は、女子たちの千尋に対する嫉妬にあった。

千尋は容姿に恵まれていた。

小柄でモデルのような背の高さは無かったが、その端正な顔立ち

クラス中の男子の視線を奪った。

そのため、高校入学当初は多くの男子達が千尋に声をかけた。

しかし、千尋は彼らの見え隠れする下心が嫌だった。

そんな気持ちが表情や声色に無意識のうちに出ていたのだろう、入学後1週間もすれば千尋に寄ってくる者はいなくなった。クラス中の女子たちの嫉妬心を残して。

そんなクラスから逃げるように、居場所を求めて軽音楽部に入部したものの、ここでもつまらない嫉妬心が千尋を孤立させた。

入部後、千尋は5人組のガールズバンドを組むことになった。

他の4人は同学年で千尋と違うクラスだったが、既に噂は流れていたようで、彼女らは始めから千尋に冷たかった。

千尋のパートがバンドの顔のボーカルだったことも良くなかったのだろう。

メンバー達との関係は良くなるどころか、日に連れてどんどん悪化していった。

千尋は「ここで逃げたら駄目だ」と頑張った。歌うことも好きだった。

しかし、段々とエスカレートするメンバー達の嫌がらせに耐えきれず、結局千尋は夏休み前に退部届を提出した。

その後千尋は違う部活に入りなおすことも考えたが、結局どこへ行ってもクラスや軽音楽部と同じことの繰り返しになるのではないかと思うと、実行に移せなかった。

千尋は独りで、2学期そして3学期を過ごした。

たぬきおじさん

千尋がその記事を木村楽器店で見つけたのは、春休みに入って少し経ち3月も終わろうとしていた月曜日だった。

木村楽器店は千尋の家の近所にある商店街に小さな店舗を持つ、楽器店兼スタジオである。

店主は千尋の父と同世代のおじさんで、店名から推測できる通り名字を木村といった。

従業員は彼以外他におらず、彼ひとりで店を経営していた。

千尋は幼いころから木村と顔見知りで、千尋が商店街におつかいに行くとき

「お、千尋ちゃん。今日もおつかいかい？えらいねえ」

と木村はよく笑いながら声をかけてくれたものだ。

太った体と豪快に笑った時の大きな口が、当時よく見ていたアニメのためきのキャラクターに似ていて、幼い千尋は密かに彼を「たぬきおじさん」と呼んでいた。

千尋はそんな木村と高校生になった今でも友好な関係をもっており、先のような幼いときの記憶や年齢が大きく離れていること、それに木村の気さくな性格のおかげか、彼とは楽しく会話をすることができた。

特に軽音楽部を辞めてからは家族以外の人物と唯一交流をもてる場所として、千尋はこの楽器店に頻繁に出入りしていた。

木村楽器店の一角には、新聞紙1枚程度の小さな掲示板がある。

木村によると、ひと昔前までは、近所に住む中高生たちがバンドメンバーを募集するためによく利用していたらしいが、見る限り最近では全く使われた痕跡が無かった。

だからこそ、千尋が春休みの暇を持て余して店を訪れたその日、入り口近くの掲示板に張ってある真新しい小さな紙が目を惹いた。

「こんにちはー。あれ？おじさん、この張り紙……」

「やあ、千尋ちゃん。そうか今はもう春休みか。ああ、その募集記事ね。昨日男の子に頼まれたんだよ。初めてみる顔だと思ったら、この春に越してきた大学生だそうだ」

「ふーん」と千尋が記事の内容を眺めてみると次のように手書きで書かれてあった。

『募集パート…ボーカル・ピアノ（キーボード）
年齢性別経験不問です。

ギターを始めたばかりの初心者ですが、一緒に練習して上達していく仲間を募っています。

ボーカル＋ピアノ＋ギターの編成で、将来福祉施設等でボランティア演奏ができればと思います。

連絡は電話もしくはメールでお願いします。お待ちしています。

蒼井秀太 18歳 大学生』

記事の端には電話番号とメールアドレスがあった。

「ボーカルも募集してるみたいだよ。千尋ちゃんが名乗り出てみたら？」

木村はわざと茶化すように言ったが、千尋は自分が軽音楽部を辞めたことについて木村が少なからずショックを受けていたことを知っていた。

去年の4月、彼は千尋が音楽を始めたことを聞いて喜んでいたので。

「この蒼井さんって人、どんな感じの人でした？」

千尋の前向きな姿勢が予想外だったのか、木村は最初少し驚いたようだったが、すぐに答えてくれた。

「えーと……すごく優しそうな子だったよ。なんていうか……纏ってるオーラが暖かいというか。それとK大学って言ってたから勉強もできるんだろうね。あとは……」

千尋に勧めたいのだろう、木村の声は弾んでいた。

彼の話聞く限り、この蒼井秀太という人物は千尋が苦手とするようなタイプでは無さそうだった。

もつとも、1度しか会ったことのない木村の感想なので、どこまで信頼できるかはわからないが。

ただ、K大学というのは千尋も少し驚いた。大学については、悲しいことに千尋とあまり関係ない話題なので、それほど詳しくは無いが、それでもK大学は地元なのである程度の知識はあった。

トップクラスとはいかないものの、偏差値は国立大学の中でも上から数えた方が早かったはずだ。駅周辺の数ある予備校にも「K大学〇〇人合格！」などとよく看板が出ている。

しかも蒼井秀太は18歳とあるので、現役で受かったのだろう。確かに頭は良さそうだ。

しかし、千尋にとってそれは心配の種になりえた。千尋は勉強があまり得意ではない。

自分と彼はあまりにも違う世界に住んでいるのではないかと思えた。そうだとしたら、やっぱり会話は弾まないだろう。ただでさえコミュニケーションは得意ではない。

一方で、僅かながら期待を持っている自分がいた。

彼は自分とも違うが、高校のクラスメイトとも違うタイプの人間だろう。

木村みたいに上手くやっていけるかもしれない。

去年の1学期以降、「このままではいけない」と苦悩した日々が千尋の背中を押した。

「ちょっと考えてみようかな……。電話番号とアドレス、控えていつでもいい？」

木村の顔が輝いた。

たぬきおじさん（後書き）

次回は7月10日投稿予定です
|（・
|・
）
|

葛藤

結局、その日にうちに蒼井秀太と連絡を取ることは無かった。16年の間に形成された、対人関係への消極的な性格はなかなか簡単に克服できるものではない。

翌日、両親が仕事に出かけそれに続いてこの春中学3年生になる弟の卓也たくやがサッカー部の練習に行った後、

千尋は2回の自室でベッドに横になりながら、電話番号とメールアドレスが書かれたメモを手を悩んでいた。

「連絡を取るか取らないか」

その問いに対して、実際には前の日の時点で既に自分の中に答えが出ていることを千尋は知っていた。それは何より、手にしたメモが証明している。だが、踏ん切りをつけることができなかった。

ベッドと机が面積の大半を占める、小さな部屋の中をウロウロ歩きまわりながら、千尋は誰かがカウントダウンでも数えてくれないかと待っていた。

千尋が秀太に最初のメールを送ったのはその日の夕方だった。

募集記事をみて興味を持ったことと簡単な自己紹介を携帯電話の画面に打ち込んだっきり、何度か躊躇った後、震える指で送信ボタンを押した。

返信はすぐには返ってこなかった。

何もせずにじっと待ち続けるのもただ緊張するだけなので、携帯電話をあえて部屋に残し千尋は1階のリビングへ降りることにした。

その後は気が気でなかった。頭の中は先ほど送ったメールのことでいっぱい、夕飯の食事中には左手に持つ茶碗を3回も落としか家族を心配させた。

食後時計を見てそろそろ返信が来てるのではないかと思ったが、何だか見るのが怖くて確認をいつい後回しにしてしまう。

部屋に戻ってケータイを開いたのは結局風呂から上がった後で、時刻は23時を回っていた。

メールを送るのにあれだけ苦勞をし、受け取るのにもこれほど緊張していたら、もしも実際に会うことになれば一体どうなってしまうのだろうか心配になる。

秀太からの返信は4時間も前に届いていた。

本日2度目、千尋は再び震える指でケータイのボタンを押した。

秀太が指定した顔合わせ場所はなんと木村楽器店だった。

秀太はいきなり2人で会うのは不安だろうと氣遣ってくれ、

その後のメールのやり取りで千尋が木村と顔見知りだということを伝えると直ぐに決まった。

会うのは千尋が記事を見つけた月曜日から6日経った日曜日の午前10時。

当初これまた秀太の氣遣いで、もっと時間をかけメールを通して互いにある程度人となりを知った上で会うか会わないかを判断する方がいいんじゃないかという提案だったが、

千尋はあえてこれを断った。自分を変えるためにも秀太と実際に会うことはもう心に決めてあったし、

その日まで酷く緊張して過ごす自分を容易に想像できたから会う日はできるだけ早い方が良かった。

これまでの人生、今までに無いほどの積極性を發揮している自分に千尋は少し驚いていた。

期待1不安9の数日間はあるという間に過ぎ、約束の日曜日がとうとうやって来た。

その日の千尋の心情はとてもじゃないが言葉で言い表せたものではない。朝は5時台に目が覚めた。

オリンピック選手の競技直前の複雑な感情から自信を全て抜き取り、さらにその上センター試験を受ける直前の受験生の気持ちを加えた

らなんとか近づくだらうか。

吐きそうだった。千尋はタイムマシンさえあればあの日に戻って、自分を止めてやりたいとすら思った。人間無理して変わる必要無いさ、とも。

狭い自分の部屋では足りず、休日の朝にリビングの中をぶつぶつ言いながら、時に奇声を上げてぐるぐる歩きまわる千尋を見て、何も知らない両親は心配し、一方千尋が先日つい口を滑らせたために事の成り行きを把握している卓也は呆れていた。

千尋は姉の威厳を捨て、ソファに座ってテレビを観ている卓也に後ろから

「卓也も一緒に来ない？」

と誘ってみたが、彼はこっちを振り向きもせず、冷たい返事で

「いい」

とフラれた。

ガツカリしながら時計に目をやると、やっと9時を過ぎた所だった。これ以上家で時が来るのを待っていれば気がくるってしまいそうだったので、

千尋はさすがに早すぎると思いながらも木村楽器店に向かった。

道の途中、はて木村楽器店は何時開店だったかしらと頭に浮かんだが、まあ何とかなるだろうとあまり気にしなかった。

初対面(1)

木村楽器店に着いて腕時計を見たら、約束の時間までまだ30分ほどあった。

ひよっとしたら開店は10時からではなかったかと、ガラス扉から店内を覗くと中学生くらいの女の子が木村と何やら話をしている。ああもうやってるんだと安心すると、千尋は勢いよく扉を開け店内に入った。安堵が緊張を一瞬だけ凌駕した。

「おっはよーございます!」

木村が千尋に気づいて振り向く。

「ああ、千尋ちゃん。おはよう。今日はえらく張り切ってるねえ」
千尋は後にこの時の自分を振り返って、寝不足はテンションをおかしくするのだということを学んだ。

さらに加えてもう一つ、その種のテンションに身を任せれば大抵恥をかくのだということも。

「ささ、こっちに。こちらが蒼井秀太君だよ」

カウンター越しに話をしていた女の子が千尋の方を見てにこっと笑った。

「へ?」

千尋は最初木村が何を言っているのか分からなかった。

蒼井秀太は18歳の男子大学生だと聞いており、今日の前で木村に紹介された人物はどう見ても年下の女の子にしか見えなかった。

「あおい、しゅうたさん?」

千尋が裏返りそうな声で尋ねると

「はい、蒼井秀太です。メールくれてありがとうございます」

とその人物はほほ笑みながら、そう答えた。

詐欺だ、と千尋は思った。確かに男だと思った上でよく、よく目を凝らすと秀太は男性に見えないこともない。

けれどもあまりに優しく可愛らしい顔に、長い髪と小柄で華奢な体

格、

中性的な声で話していたその姿は店の外から見た限りは完全に女性、
というか女子だったのだ。

木村と話していたのが秀太だとわかったら、あんなバカっぽい登
場の仕方は絶対にしなかった。

千尋は木村をキッと睨んだ。先日千尋が秀太の特徴を訊いた時、
内面ばかりでこれほど男子大学生として特殊な外見を彼は言わな
かった。

そんな千尋の無言の八つ当たりを知ってか知らずか木村はさらりと
次の会話に移った。

「それじゃあ、まあ。どうせこの店に客なんて滅多に来やしない
から、その辺の椅子にでもかけて話したらいいよ」

木村は「上手くやるんだよ」と言うような、ほぼ両目をつむる不
完全ウインクをさりげなく千尋に送った後、カウンターから出て店
の奥の方へ引っ込んで行った。

千尋は木村が席を外す形になって急に不安になったが、のっけから
大恥をかいたのだからもうどうにでもなれと開き直すことにした。
木村に言われた通りふたりが横に並ぶ形で長椅子に腰かけると、千
尋はまだきちんと挨拶をしてないことに気がついて慌てて口を開い
た。

「は、はじめまして。私が神崎千尋です。さっきはごめんなさい。
約束の時間までまだ30分もあったので……」

初対面でいきなり外見に触れるのはさすがに失礼だと思い、とっ
さに言い訳を繕う。

「いえいえ。僕も、気合いが入ってたので早めにきちゃいました」
「も」という部分に少しアクセントをつけて秀太が言った。それ
を聞いて千尋の顔が赤くなる。

しかし秀太のその言い方には決してバカにしたような感じは無かつ
た。千尋は秀太に好感を持った。

「あまりに緊張してたんでちょっとハイになってたんです……」

話した後で内容に論理性が全くないなと千尋は思ったが、秀太はあはは、と笑ってくれた。

これも愛想笑いではなく本当に心から、という見ているこっちも幸せになるような笑顔だった。

女の千尋から見ても可愛いと思ってしまうその顔を見て、彼の男友達は大丈夫だろうかとふと心配になった。

「ものすごく内気な女の子って聞いてたから、ちょっとビックリした」

秀太のその言葉に千尋は「ん？」と思った。あらかじめ聞いてた？店の奥に目をやると、こっちを見ていた木村がさっと隠れた。そういうことですか。

「人見知りなもので……」

人見知りだということを面と向かってちゃんと言えた自分を超人見知りの千尋としては褒めてやりたかった。

会話の流れは悪くない。いつものような気まずい空気はそこに感じなかった。

案外例のファーストコンタクトもそう悔いるものでは無かったのかもしれない。

「メールをもらった時」

秀太がゆっくりと口を開く。

「メールをもらった時、こんなに早く連絡が来ると思ってなかったから驚いた。なんせ募集主は楽器初めてたばかりの初心者だからね。」

編成も目的も普通のバンドメンバー募集とちよつと違うし。このお店以外にも沢山楽器店回ったんだけど、『どうせ集まらないよ』って断られるところもあったし。

だからメール貰ってすごく嬉しかった……ってまだ一緒にやるって決まっていんだよね」

秀太はそう言ってまた笑った。

「どうして、その、こういう募集をしようと思ったんですか？」

「うーん、と。まず単純に歌が好きで。歌詞がある歌が、ね。それで今年大学生になって、ほら大学生って人生の中で一番自由な時間が多いって言うから、

今まで色々励まされたりしてきた分、今度はひとを元気づける側になりたいなって。でもそれにはひとつ問題があって……」

「問題って？」

千尋が尋ねると、秀太はちょっと首をかしげて「何でしょう？」と言うような、いたずらっぽい表情をした。

それを見て自分が男だったらこの瞬間もう落ちたなと千尋は思う。「めっちゃ音痴なんだ、僕。だから代わりに誰か歌ってくれる人が必要だった。一緒にピアノを募集したのは伴奏が僕ひとりじゃ何だか心細かったから。演奏の幅も広がるし」

「音痴、なんですか？すぐ綺麗な声なのに」

「うん。ホント、すごいよ。逆の意味で。この声もなあ……。あまり良い思いをした記憶は無いけど……。それにこんな声だと余計に……」

言葉が続けかけて、そこで口を閉じる。

「女の子と間違われる？」

千尋が代わりに言ってみた。すると秀太は大げさに驚き

「うわぁ、ひどい！年下に見られるって言おうとしたんだよ！」

そう言って笑った。千尋もつられて笑う。久しぶりに会話が楽しいと思えた。随分と懐かしい気持ちだった。

「でも、本当に間違われるでしょ？」

「うん？さあ、どうでしょう」

秀太は自分の髪を触りながらとぼけ、話題を変えた。

「君はどうして応募してきてくれたの？」

そう聞かれ千尋は少し悩んだ。自分を変えたかった、そんな理由を秀太に告げるのは何だか恥ずかしかった。

寂しい人間だと思われるんじゃないかという不安もあった。迷った末に出した答えは保身だった。

「私も、歌うのが好きだったから。このお店にはよく通って、たまたま募集記事が目に入って興味を持ったの」

言いながら、自分は弱いと思った。聞いていた秀太はそう、とひとつ呟いた。

初対面(2)

その後、店の地下にあるスタジオで秀太のギターの音を聞くことになった。

本当に始めたばかりなので、演奏を聞いてみて組むのは無理だと思ったら遠慮しないで断って欲しいという、本人たっの希望だった。

店の隅に置いてあったギターケースを細い腕でよいしょと持ちあげる秀太の姿は、

正に文化祭シーズンの中学生のようだ。

秀太の後に続いて店の奥の階段を下り、たった一部屋しかないスタジオに入る。

何故か木村もついてきた。千尋もここに来るのは久しぶりだった。秀太はケースからギターを取り出し、チューナーを手にチューニングを始めた。

「耳を使ってできたらカッコいいんだけど、音痴はこれだから……」と呟きながらペグをまわす。

チューニングが終わると、ピックを持ってパイプ椅子に座り、

「座ってじゃないと、上手く引けないんだ」

そう言って簡単なコードを弾きはじめた。

秀太の演奏は本人が言う程そう悪くはなかった。

いや、寧ろ初心者でここまで出来たらかなり上出来といっているだろう。

左手のコード進行もスムーズで、ピッキングも軽やかだった。

千尋が軽音楽部時代に、散々難しいと耳にしていたバレーコードも簡単にやって見せた。

千尋の隣で聞いていた木村も、秀太の演奏が終わると拍手をして称えた。

「蒼井君上手じゃない！まだ始めたばかりなんだろう？誰かに

習ってるの？」

秀太は少し照れたように笑って、

「いえ、こっちに越してくる前に父に教えてもらってたんです。このギターも元は父の物で。合格が決まってからの2、3週間は1日中練習しました」

「へええ、お父さんがねえ。随分教え方が上手なんだなあ。あ、そうだ千尋ちゃんもなんか歌う？マイクもあるし」

「ふえ！？」

思わず変な声が出た。そんな心の準備、今日はできていない。なんてことを言い出すのだ、おじさん。

だが、冷静に考えてみれば2人はわざわざお茶するために会った訳じゃないのだからこの流れは当然であり、ここ数日間顔を合わせることでだけで頭が一杯だった千尋に負い目はある。

「ここでちゃんとアピールしとかないと、アピール」

「歌うって、アカペラですか！？」

「そんなフルコーラス歌う必要はないからさ、きみもワンフレーズだけでも歌声を聴いてもらわないと、ね？蒼井君」

千尋は「困っています」という眼を送ったが虚しくも届かず、秀太は二重の大きな瞳を輝かせて

「うん、ぜひ聴きたいな」

と答えた。千尋にもう逃げ道は無かった。

マイクの準備を始めようとする木村を止めて、千尋は何を歌おうか考えた。

秀太も知っている曲がいい。そして何より上手に歌える曲。予めちゃんと練習してくるべきだった。

「えと、じゃあ井上陽水さんの『少年時代』のサビの所を歌います」

父の好きな曲だ。家族でカラオケに行くときよく歌った。

静かなスタジオの中、無伴奏で歌うのは中学校の時の歌のテスト

を思い出して気恥ずかしかったが、
短いワンフレーズを無事に歌いきった。
その後秀太は拍手をして「すごく優しい歌声だ」と言ってくれた。

初対面(2) (後書き)

次回は7月15日(金) 投稿予定です
| (・
| ・
|)
|

ふたりの春休み

学校が始まるまでの数日間、

千尋と秀太は毎日のように木村楽器店のスタジオで音を合わせた。そんな2人に木村はいつもご機嫌顔で場所を提供してくれた。

練習していたのは、あの日歌った井上陽水の『少年時代』と、

秀太が好きだという槇原敬之の『どんなときも。』という曲だった。2曲とも弾き語りでは定番の曲のようで、楽譜は簡単に手に入った。

秀太のギターは日を追うごとに上達していき、

春休みが終わる頃にはピック弾きだけでなく、指で弾くアルペジオの技法も身につけていた。

その間千尋も負けてはいられないと、

軽音楽部を辞めてからもう何ヶ月もしていなかったボイストレーニングを再開した。

部活で教わったメニューだけでなく、本屋に立ち寄って指導書を買ったり、インターネット上のアドバイスを試したりもした。

何かに対して、ここまで一生懸命になれるのは久しぶりだった。

秀太のおかげで、この春休みは当初予定していたより遥かに充実したものとなった。

あの日、勇気を振り絞って本当に良かったと千尋は心から思う。

時間を共にする間に秀太について分かったことがいくつかある。

ひとつは彼が今年から大学に入り専攻する学問が物理学だということ。

彼が理系だったのは少し意外だった。

「算数」の時代から数式と相性が非常に悪かった千尋にとっては、全く縁の無い世界だ。高校の科目選択では迷わず生物をとった。

いつの日か秀太はとても楽しそうに物理や数学の魅力を語ってくれ

たことがあったが、

千尋にはさっぱり理解できなかった。

地方出身で下宿生だということも聞いた。

こっちに来て、人の多さや電車の便利さに驚いたそうだ。

彼の地元では電車は1時間に1本来るか来ないかで、高校も徒歩通だったため、それまでにほとんど電車に乗ったことが無いという話を聞いた時、今度は千尋が驚く番だった。

他にも、身長が女子の中でも小柄な千尋と5cm程度しか変わらないこと（ついでに体重もほとんど変わらなかったが黙っておいた）や、

クセ毛が目立たないように髪を長めにしていること、茶色がかったその髪は千尋と同じく地毛であること、

さらには主食が菓子パンであること（なんで太らないのだろう？）なども知った。

そして何より、秀太は本当に優しく暖かい人だった。

女性的な外見の通り、粗暴さというものが欠片も無かった。

一緒にいるだけで笑顔になれる、まわりの空気や人間をも優しくするような彼の雰囲気は正に天性のものだ。

必要以上に人付き合いに緊張し、つい壁をつくり距離をとってしまう千尋でさえ、

それまでの人生が嘘のように彼とはすぐに打ち解けられた。

本当に不思議な気分だった。

ふたりの春休み（後書き）

次回は明日7月16日（土）投稿予定です
（．
|．
）
|

新しいクラス

4月に入ってまもなく、千尋は進級、秀太は入学をした。

授業が始まって最初の1週間を終えた週末、

いつものスタジオで千尋が大学の入学式の感想を訊くと、秀太はギターを弾く手を止め、思い出するように少し天井を見上げた後、

「人が多すぎて疲れた。あとサークルの勧誘がすごくてさ、駅から会場までの道にビラ配りの人がズラーっと並んでるの。捕まったら最後だと思って逃げた」

とうんざりした様な顔で答えた。

「サークルに入る気はないの？」

「入る気がないから、ここでこうやって練習してるんだよ」

「ふーん」

あまり関心がない素ぶりをしながらも、千尋はそれを聞いて内心安心していた。

ただ秀太がサークルに参加しようとしなのは不思議だった。

そもそも軽音サークルにでも入れば、あのような募集をしなくても簡単にメンバーが集まるはずだ。

気にはなったが、秀太の気が変わってもと思いついて尋ねず、話題を変えることにした。

何気なく会話を始め、さらに進めるというこの行為は、本来千尋が最も苦手とすることの一つだが、秀太に対しては自然にできた。

自分の話を必ず聞いてくれるという確信が、千尋の背中を押してくれる。

「大学の授業はどう？」

「うーん。最初の1週間だから、どの講義もガイダンスみたいな事ばかりで、まだ何とも言えないかな。」

でも、同じ学科の人何人かちゃんとコミュニケーションがとれて安心した。同級生が全く知らない人達ばかりなのは小学校以来だか

ら」

「コミュニケーション」という単語が鋭く千尋の胸に刺さった。だが、秀太に気づかれぬような表情には出さない。

「そっか、良かったね」

クラスが変わっても、やっぱり千尋に友達はできなかった。

自分から話しかけなければ、と頭では分かっているのだが、いざとなつて実行に移せない自分もどかしかった。

会話が續かなくて相手に気まずい思いでもさせたらどうしようか、などといった考えてしまい、あと一步がどうしても踏み出せない。秀太と出会ったことで自分は少し変わったんじゃないかという、始業式当初の淡い期待はその日のうちに打ち砕かれた。

去年と同様、千尋に話しかけてくれるのは下心丸出しの男子ばかりで、

この春休みの間、秀太と一緒にいたこともあり、今年は特に彼らの下品さが際立った。

そんな男子達にちやほやされ、その上で彼らに素っ気なく振る舞う姿を見て、女子達は自ずと千尋を避けるようになった。

これも去年と同じだった。

ただ、去年と違う点がひとつだけあった。

クラスで孤立していたのが千尋だけじゃなかったのだ。

その子の名前は五十嵐彰いがらしあきらといった。

身長の高い女の子だ。加えて体格がよく、顔つきも女子にしてはどこか鋭いものがあり、体操服姿の彼女はまるで男の子のようだった。千尋と同じく部活動には参加していないようで、授業が終わるといつも淡々と帰り支度をする。

だが、彼女の場合千尋とは少し違い、自ら進んで孤独を望んでいるようだった。

教室にいるときは窓際の席でいつも機嫌の悪そうな顔をしていて、

周りに他人を寄せ付け^{ひと}ないオーラを出している。

実際、彼女が誰かと話をしてい^{ところ}は1度も見かけたことがなかった。

クラスで浮いているそんな彼女は、一見ガラの悪い不良少女にも見える。

しかし千尋は今年度同じクラスになって初めて彼女の存在を知った。それは即ち昨年彼女について特に悪い噂を聞かなかったということであり、

対して、本当に素行の悪い何人かの生徒の名前に関して言えば、交友関係が全く無いと言っても過言ではない千尋の耳にも入ってきた。

事実、彼女は授業中もちゃんと前を向いて先生の話を聞いているし、朝遅刻することもなかった。

それなのに、何でいつもあんなに怖い顔をしているのだろう。

そんな彰を、外見内面共に秀太と正反対の人間だなと思^いながら、千尋は遠く離れた席から眺めていた。

新しいクラス（後書き）

次回は明日7月17日（日）投稿予定です
（．
|
．
|
）
|

待ち合わせ（前書き）

時間軸は『序』から繋がっています。

待ち合わせ

ゴールデンウィークの間、秀太は帰省していたので会うのは久しぶりだった。

千尋が秀太の顔を見て、あることに気がつく。

「あ、そういえば髪切った？」

「やっ！？いつ訊かれるか待ってたのに」

「女の子じゃないんだから……」

秀太は長かった髪を、耳がやっと隠れるくらいまでに切っていた。

「ここまで短くするのは久しぶり。どう？似合う？」

無邪気に笑うその顔は、

カッコいい男の子というより寧ろボーイッシュな女の子に近かった。

「うん、似合う似合う。やっぱ夏も伸ばしてたの？」

「うん。僕の高校、校則緩かったから」

そういうことじゃないんだけど、と思いながらも突っ込まない。

その代わりに今日の話題を持ち出した。

「由香里さんって、どんな人かな？」

ピアノを弾いてくれそうな人が見つかった、という連絡を秀太から電話で聞いたのはゴールデンウィークに入る前日の夜だった。

「えっ？ホント？」

「ホント。前に募集記事をいろんな楽器店で貼らせてもらったって言ったよね？そのうちのひとつを見てメールくれたみたい。あれ、もう少ししたら書き直そうと思ってたんだけど。」

そういえば、ああいう募集記事っていつまで貼られてるんだろ？やっぱ人が集まったら外してもらいに行かなきゃいけないのかな……」

3人で会うのはゴールデンウィーク後最初の土曜日、S駅前の広場。

ということ、今回は木村楽器店ではなく、いつも人で溢れるこの大きな街まで出てきて待ち合わせたのだ。

「たしかK女学院の2回生って言ってたよ。ピアノは3歳から始めたって」

千尋はそれを聞いて驚いた。

「3歳!? ひえー。K女だし、ひょっとしたらお嬢様かも。でもそんな人がなんでわざわざ? クラシックとかじゃないのかな」

「わかんないけど、まあ上手だったらそれに越したことはないんじゃない?」

秀太は至ってお気楽気分でフンフン、と鼻歌まで歌っている。確かに音痴だった。

千尋はふと、自分たちがまわりの目から見て一体どんな風に映っているのだろうかとなった。

おそらく男女のカップルとは思われていないだろう、と横目で秀太を見ながら思う。

かくいう千尋自身も童顔で、普段化粧をしないことも加えてしばしば中学生と見間違われる。

ということは、だ。

きつと、女子中学生達が部活もせずに朝から遊びに来てる、なんて思われているんだろうな、とひとつため息がでる。

そして嫌な予感がした。秀太と初めて会った時のことを思い出す。

「こんなに人がいて、由香里さん私たちだってわかるかな? 秀太、由香里さんに私たちのことなんて伝えたの?」

「え? いや普通に『大学生と女子高生の2人組です』って」

秀太が不思議そうに答えた。まずい。見つけられないかもしれない。いい。

「秀太、一応時間になったらギターを思いっきり周りにアピールして」

「……ヘンな人だと思われるの嫌だよ……。きつと大丈夫だって」
実際大丈夫じゃなかったんだと千尋が言いかけたその時、

広場から少し離れた駅の駐車場に1台の真っ黒な外車が入って来て止まった。

運転席から紳士的な初老の男性が降りてきて、ガチャッと後ろのドアを開ける。

中から出てきたのは、いかにも上等そうな純白のワンピースに身を包んだ、モデルのような体型をした美しい女性だった。

そんな彼女の姿を見て、千尋と秀太は互いに顔を合わせ、「まさかね」と言って笑う。

運転手が車を出した後、駐車場に残されたその女性は少しキョロキョロとあたりを見回した後、

秀太の足元にギターを見つけると、千尋に目をやり、ほほ笑みながら手を振った。

待ち合わせ（後書き）

次回は明日7月18日（月）投稿予定です
――（．）――（．）――

3人目(1)

「初めまして。大江由香里です」
おおえゆかり

千尋と秀太は最初呆気に取られて固まっていた。

由香里の声で2人とも我に返り、慌てて自己紹介をする。

「初めまして。ギターの蒼井秀太です」

「ボーカルの神崎千尋です」

そう言って2人は深くお辞儀をした。

何だかそうしなければいけないような気がして「そんな、かしこまらなくても」と由香里に困った顔でそう言われるまで頭を下げ続けた。

「よく私たちだっけわかりましたね」

千尋は不思議に思った。

秀太がギターを持っているとはいえ、この広場には楽器を持った人間など沢山いるのだ。

「ええ、それは。すぐにピーンとききました。ああ、この方達だっ
て」

由香里は、ほほ笑みながらそう答える。綺麗な人だ。

モデルのように細く、背も高い。ヒールを合わせれば優に170cmを超えているだろう。

まっすぐ肩まで伸びた烏羽色の髪は、シャンプーのコマーシャルに出てくる女優を思わせた。

そんな彼女の前では千尋も秀太もいっそう幼く見えた。

「今回はありがとうございます。ピアノもあるスタジオの予約をとってあるので、そこで僕らの演奏を1度聴いてから判断してもらったと思います」

秀太が言う。

「わかりました。それにしても……」

「ん？」と秀太が首をかしげる。

「蒼井君は女の子みたいです」

千尋は笑ってしまった。

駅前のメインストリートにあるそのスタジオに来るのは3人とも初めてだった。

受付のお兄さんが強面のスキンヘッドな上にデスメタルのTシャツに身を包んでいたので、千尋は思わず肩に力が入ったが、

秀太は全く臆することなく速やかに学生証を提示しお金を払って、無事に入会を済ませる。

案内されてピアノのある部屋に入り、秀太がチューニングを終えると、2人は由香里の前で春休みからずっと練習してきた『少年時代』と『どんなときも。』に、

新学期から練習を始めたスピッツの『空も飛べるはず』を加えた3曲を続けて演奏した。

その間、由香里は椅子に座って2人の演奏をずっと笑顔で聴いてくれた。

「とても息が合っていますね。千尋ちゃんの声はとても優しい声で癒されます。始めたばかりだと聞いていたので蒼井君には驚きました」

聴き終った後に由香里はそう言うと、椅子から立ち上がって、部屋の隅にあるグランドピアノに向かい席に着き、

「では、次は私の音を聴いてもらいますね」

と、演奏を始めた。

千尋はクラシック音楽に関してはまるで素人なので詳しくはわからないが、由香里のその腕前はほとんどプロのピアニストと言っているように思えた。

どうしてあんなに自由自在に動かせるのだろう。由香里の指を見て千尋は真剣にそう考えてしまう程だった。

秀太も千尋と全く同じ様子で、2人は由香里の奏でるピアノの世界

にしばしの間引き込まれた。

細い指で最後に叩かれた鍵盤の音が鳴り終わると、2人は自然に拍手をしていた。

それを見て由香里はにこりとほほ笑み、

「私も仲間に入れてくれますか」

と言った。それを聞いて秀太は慌てて言葉を返す。

「僕らはもちろんですけど、ね？」

同意を求められて、千尋はすぐに首を縦に振る。

「ただ由香里さんは僕たちで良いんですか？発表の場とかもまだ全然予定無いですよ？もっと上手い人たちの方が……」

「いいえ、あなたたちが好いんです」

由香里はそう言って、またにこりと笑った。

3人目(1)(後書き)

次回は7月22日(金)投稿予定です
| (・
| ・
|)
|

3人目(2) (前書き)

予定より投稿が1日遅れてしまいました(＜|＞)

3人目(2)

スタジオを出ると時刻は正午を少し過ぎたところで、3人は駅近くにあるファミレスで昼食を食べることにした。

全国にチェーン展開するその店は、週末ということもあって家族連れや制服を着た中高生など多くの人で賑わっており、席に案内されるまで30分近くかかった。

「由香里さんはファミレスとかに来ることあるんですか？」

やっと席に着き、メニューを眺めながら秀太が言う。何故かデザートコーナーのページを開いている。

「ええ、よく来ますよ。マクドナルドだって行きますとも」

そう答える由香里の目線の先はビッグハンバーグ。千尋が手元のメニューでみると1300キロカロリーを超えていた。

結局千尋はカルボナーラを、由香里はそのままビッグハンバーグにライスセット、秀太はフライドポテトとチョコバナナパフェを注文した。

若いウェイトレスは注文を繰り返した後に「パフェは食事と一緒に持って来てください」と秀太に声をかけられ、「はあ」といぶかしげに返事を返した。

「どんな食事……」

呆れて言った千尋の言葉など秀太は気づきもせず、注文が終わってもまだメニューのデザートコーナーを眺めながら「やっぱこっちが良かったかな……」などと呟いていた。

目の前に運ばれてきた由香里注文のビッグハンバーグは、メニューで見るよりもっとビッグだった。

しかしこの細い体に入り切るんだろうか、という千尋の心配をよそに由香里はどんどんハンバーグを小さくしていく。

「おふたりは、普段どんな風に練習をしているんです？」

「千尋の家の近所にある木村楽器店というところで。えっとH線

のR駅です。基本的に2人で合わせるのは週末に。僕はアパート暮らしだから弱音器つけても夜は練習できなくて、ほとんど毎日学校帰りにそのスタジオを貸してもらっていますけど。それで時々千尋もやって来て平日に合わせることもあります」

秀太がフライドポテトを手を答える。パフエはまだ来ない。

「じゃあ私も週末は空いているので、そこに参加させてもらいます。ステージ用のキーボードも持っているので、ピアノがないスタジオでも大丈夫です」

「重くないですか？」

千尋が訊く。カルボナーラは既に食べ終えた。

「いえ。高梨、えっとさっきの運転手です、がいますから」

さすがはお嬢様だ。

3人でフライドポテトの皿を空にしたところで、秀太のパフエがやっと運ばれてきた。

普通なら「『食事と一緒にもってきて』っていったのに」と文句のひとつも出てきそうな所だが、秀太は笑顔でパフエを受け取り「わお」と小さく声を上げた。

「野菜とかちゃんと食べてるの？」

本来、年上の大学生に向かって言うことはあまりないであろう言葉が、つい口から出る。

「うん、まあ」

たぶん嘘だ。千尋はチョコバナナパフエを嬉しそうに食べる秀太を見て、なんでこんな食生活をしていて太らないんだろうかと真剣に悩む。

ひょっとしたら甘いものばかり食べているから、こんな外見なのだろうか。スイーツ美容法などというものが科学的に証明されれば全国の女性たちにとってそんな楽な方法他に無いのだが。

太らないといえは由香里もそうだ。あれだけの量を食べて、あんなに細い体をしているのは何か秘密があるのだろうか。機会があったら今度訊いてみたい。

そんなことを考えている千尋に耳に、「千尋？」という秀太の言葉が急に入って来て、ふと我に返る。

「そんなにじっと見つめられると恥ずかしいな」

「ご、ごめん！」

慌てて目をそらした。そんな千尋の様子を見て由香里が笑い、秀太はスプーンを口にくわえたまま不思議そうな顔をしていた。

3人目(2)(後書き)

次回は7月31日(日)投稿予定です
| (.
| .
|)
|

ころろ

次の週末、3人は予定通り木村楽器店に集まった。

キーボードを担いで店内に入って来た由香里を見て、木村は「これはまたえらい美人さんが……」と目を大きくした。

「綺麗なだけじゃないですよ、すごい上手なんだから」

千尋が店の奥から出迎える。

「こんにちは、由香里さん。良かった、迷いませんでした？」

「いえ、高梨は運転に関してはプロですから。住所さえ分かれば大丈夫です」

「すごいんですね。えっと、スタジオはあっちです。秀太も来てますよ」

由香里を連れて地下のスタジオに向かう。カウンターで木村が「誰の店だか……」と呟いたが聞こえなかったふりをした。

先週ファミレスで相談をした結果、3人で演奏する初めての曲は『世界に一つだけの花』に決まった。

店を出た後に再びメインストリートまで出向き楽譜を探した。上級者である由香里のピアノを生かした方がいいという秀太の案で、演奏難度が少し高めのピアノ弾き語りの楽譜にすることにした。

秀太のギターはどうするのか、と訊くと、彼はバンド譜やギター弾き語り譜を参考にしてアクセントのような役割で参加する、と答えた。

「あ、由香里さん！道に迷わなかった？」

椅子に座ってギターを弾いていた秀太が千尋と同じことを尋ねたので、千尋と由香里は顔を合わせて笑った。そんな2人をみて秀太

は首をかしげる。

「ええ、大丈夫でした」

そう言って由香里はキーボードを下ろし、準備を始める。

「スピーカーは付いてる？」

「はい、スピーカー搭載のタイプです」

「良かった。それじゃあアンプとか、ケーブル関係は必要ないね」

「ええ、私も電子楽器の繋ぎ方はよくわからないので」

千尋は2人の会話を聞いて、軽音楽部では最初にスタジオ機材の使い方を教わったことを思い出した。

しかし新生はみんな早く楽器を弾きたくてうずうずしていたので、あまりまじめに聞いていなかったし、

実際細かい調整は上級生がほとんどやっていたので特に問題はなかった。

キーボードの準備を終えると、由香里と秀太は最初に伴奏の打ち合わせを始めた。3人の持つ楽譜には本来無いギターパートについてだ。

秀太は予め言っていたように、ギターが入った楽譜をいくつか参考にして、コピーしたピアノ弾き語り譜に少し書き込みをしてきたようだ。

「イントロとサビの前にこう入って、あとは16ビートで小さくコード弾きしようかと思ってるんだけど。それかバラード調ならアルペジオだね。一応両方とも練習はしてきた。このピアノ譜的にはどっちが合うのかな？」

秀太の問いかけに由香里は少し考えた後、

「せっかく3人でやる初めての曲なので、明るく16ビートでいきましよう」

と言った。

弾き語りの譜面を弾くのは初めてだと言っていたが、由香里のピアノ演奏は相変わらず聴いていて惚れ惚れするようだった。

一方秀太は、今まで1人でこなしていた伴奏を今回初めて2人です

るということで、由香里のピアノと合わせるのに最初は少し苦労していた。

それでも、彼の言うところ吹奏楽部の経験が生きたのか、30分程2人で練習を続けているうちにある程度さまになってきた。

「1回、千尋に入ってもらおうか」

秀太の掛け声で千尋も演奏に参加する。

2人だけの時は使っていなかったマイクを今回から使用することになっていた。ハウリングに注意して左手に持つ。その手は少し汗ばんでいた。

軽快なアコースティックギターの音でこの曲は始まる。跳ねるようなピアノの演奏がそこに加わり、イントロを迎える。

2人が奏でる浮き浮きするようなその序奏は、聴いている者を心から歌いたいと思わせ、無意識に体を揺らせる。千尋も例外ではなく、Aメロに入ると口は自然に開いた。マイクを握る手はもう汗ばんでいなかった。

生の演奏をバックに歌うことが、これほど心地いいとは千尋は今まで思いもしなかった。

少なくとも、軽音楽部でのそれは「楽しさ」とは、遠くかけ離れていた。

楽器の弾き手の心が、どんなに演奏に反映されるか、歌い手の気持ちに影響するか、この日千尋は身にしみて感じた。

学生の本業（1）

この日は午後から秀太と由香里が千尋の家に来ることになっている。

1学期の中間テストが迫り、先日秀太に冗談半分で勉強を教えてくれと言ったら思いもよらず快諾してくれたのだ。

このことを話すと意外にも母は喜び、ついでに卓也も教えてもらえるよう頼んでよとまで言われた。ふつう家庭教師の料金はなかなか高いらしい。

テレビを見ていた卓也は嫌そうに「えー」と抗議の声を上げたが、毎回赤点だらけの彼は母に一喝された。

2人に教えるんだったら、教える方も2人いた方がいいだろうということで由香里にも頼み込んだ。

英文学科の彼女は、英語だけだったら、という条件で依頼を受けてくれた。

当日になっても「なんで俺まで……」とぶつくさ文句を続ける卓也に

「まあいいじゃん。それに由香里さん、すごい美人だよ」

と千尋が諭すが効果は得られず、終始卓也はソファの上でそっぽを向いたままだった。

駅まで2人を迎えに行くことになっており、秀太のことだからと約束の時間より幾分早めに向かうと、やっぱり彼の姿があった。

「わざわざありがとね」

「いえいえ」

「なんか弟まで一緒になっちゃったし」

「弟君はいくつ？」

「中学3年生で何気に受験生。サッカー推薦で行くんだなんて言ってるけど」

「サッカー部なんだ」

「うん。市の大会が終わるまでは全然勉強する気ないみたい」

「僕も中学の時は部活ばかりで全く勉強しなかったからなあ……。あ。そうそう、だから中学の範囲は逆に教えるの難しいかも」

「何部だったの？」

「んーと吹奏楽部。音感無いから打楽器だった。千尋は？」

「私はテニスやってた。軟式の方」

千尋はそう答えながら、高校でテニスを続けなかった理由を秀太に訊かれるのではないかと内心ドキドキしていた。

あまり触れられたくない話題だった。そんな千尋の心を読み取ってか、秀太はその後「そっか」と頷いただけで、それ以上話を進めなかった。

約束の時間になって、高梨の運転する車に乗って由香里がやって来た。今日は黄色のワンピースだった。

家まで乗せていってもらえることになり、由香里に続いて千尋と秀太も車に乗り込む。中の広さはもちろん、シートに座るとあまりに手触りが良くて驚いた。

運転席の高梨に住所を告げると、彼は「承知しました」と一言だけ言い、それ以上の指示は不要で家に着いた。さすがはプロだ。

「ただいまーっと。お母さん！いらっしやったよ！」

千尋が玄関を開けて呼ぶと、母はバタバタと足音を鳴らせ急いで玄関にやって来た。

「あらあら、初めまして千尋の母です。いつも千尋がお世話になっております。今日はわざわざいらして下さってありがとうございます。本当に千尋は……」

「取りあえず上がって貰おうよ。卓也も紹介しなくちゃいけないし」

母の話が長くなりそうだったので、千尋は慌てて割り込む。

リビングに入ると、隅にあるソファの上に卓也が落ち着かない様子で座っていた。彼なりに気を利かせたのか、テレビはちゃんと切っていた。

「ほら、卓也もちゃんと挨拶しなさい」

と母が言う。卓也は「わかってるよ」と小さく呟いて立ち上がり、ふたりに挨拶をした。

「神崎卓也です。中学3年生です。今日はよろしくお願いします」
後に続いて秀太と由香里が自己紹介をする。

「えっと蒼井秀太です。K大学の1回生で、専攻は物理です」

「大江由香里です。K女学院の2回生です。こちらこそよろしく
お願いします」

由香里がほほ笑んで、それを見た直後に卓也はすっと目をそらした。

「それで今日はどんな感じにしたらいいのかな？」

秀太が訊く。

「2階に私の部屋と卓也の部屋があるから、2人別々に分かれて
もらって1時間交代で計2時間お願いしようと思ってるんだけど」

「うん、オッケー。間に20分くらい休憩も入れよう」

「はい、わかりました。私は英語しかできませんが」

「神崎家に英語得意な人はいないんで大丈夫ですよ」

母の言葉に笑いが起こる。より正確に言えば神崎家に勉強が得意な人はいない。

「最初はどう分かれましょうか？」

「うーん。まあ男女で別れたらいいんじゃないかな。ね？」

秀太が卓也に視線を送る。同意を求められた卓也は慌てて答えた。

「え、あ、はい。俺は何でもいい、です」

「んじゃ、決まりで」

と言って秀太が卓也の横についた。卓也は中学生ながら身長が175cm程あり、サッカーで鍛えられて体格もいいので、その横に

秀太が並ぶとあまりにギャップがあって可笑しかった。

「中学生カップルの出来上がりですね」

そんな様子を見た由香里が笑いながら言う。

「由香里さん、たまにヒドいよね……」

秀太は力なく笑ったが、秀太と卓也の組み合わせを最も的確に表す表現だと千尋も思った。隣の卓也はさっきからチラチラと秀太の様子を伺っている。

「それでは始めちゃいましょうか」

由香里の一言で4人が階段へと向かう。母の「しっかり教えてもらいなさいよ」という声が後ろから聞こえた。

「あれは詐欺だろ……」

階段を登る途中、隣で卓也が後ろの秀太をチラッと見た後小声でそっと囁いた。思わぬ形で血のつながりを実感した。

学生の本業（2）

由香里と2人きりになるのは初めてだったので、最初は少し緊張した。

小学校入学を機に買ってもらい、その後本来の用途を一切為していない学習机に千尋が座り、その横に由香里が立つ。

「とりあえずテストの出題範囲を見せてもらえますか」

「あ、うん」

由香里に言われて千尋はリーディングとライティングの教科書をカバンの中から取り出す。

教科書がカバンの中に入ったままだという時点で、少なくとも前日は勉強しなかった事がバレてしまった。

それでもテスト範囲だけはきちんと教科書に書き込んでいた。由香里はその雑な走り書きを読み、

「リーディングの方は本文から出題みたいなので、対策が取りやすいと思います。まあその辺はきつと蒼井君が得意だと思うので、彼に任せちゃいましょう。」

私は一応英文学科なので文法、ライティングの方を教えますね。それで時間が余ったらリーディングもしましょう」

と提案した。

千尋は英語を中学校で学び始めてから、アルファベット、三人称単数、過去形、現在進行形くらいまでは、他の科目に比べてもなかなか順調だったが、

現在完了が現れたあたりから雲行きが怪しくなり、不定詞が出てきた頃には完全に詰んでいた。

それからは勉強する気さえ起きず、「解らない所が解らない」という究極の状態。

毎回答案を受け取るたびに「自分は日本人だから」と、英語が出来ない学生お得意の言い訳を自分にしてきた。

そんな文法アレルギーな千尋だったから、由香里の説明が面白いように頭に入ってきた事に非常に驚いた。秀太といううちに自分まで頭が良くなったのではないかと錯覚する程だった。

実際には由香里の説明が上手なのと、普段の学校での授業と比べて抜群に集中しているからという、ただそれだけの事であるが。

「このページの問題も全部合っています。千尋ちゃん、出来るじゃないですか！」

褒められて伸びる、とはこういう事なんだろうなと千尋は思う。

「ライティングはとりあえずこの辺にしておきましょうか。ええと、残りの時間は……微妙なところですね」

時計をみると、勉強を初めておそよ45分が経ったところだった。

「ちょうど授業1限分だし、リーディングは丸暗記でなんとかなるから、ちょっと早いけどもう休憩入っちゃおうか。

たぶん弟も、もうとっくに鉛筆投げだしてると思うし」

卓也が30分以上机に向かうことなど、千尋には考えられなかった。自分も言えた様な口ではないが。

由香里は「うーん」と少し考えた後、

「そうですね。それじゃあ休憩しながら口頭で単語テストでもして待ちましょうか」

と千尋に同意した。

「あ、そういえば！」

椅子から立ち上がりかけた千尋の言葉に由香里がはてなを浮かべる。

「ずっと訊こうと思ってたんだけど、由香里さん、なんで私たちを選んだの？」

秀太が言ってたようにもっと上手な人と組んでどんどん発表の場で演奏すれば良かったのに」

由香里は一瞬困ったような顔をしたが、すぐにほほ笑んで語り始

めた。

「前に言ったとおりですよ。ピーンときたんです。千尋ちゃん達を見て、演奏を聞いて。この人たちと一緒に音楽をしたいなって。音楽って単純に技術だけじゃ駄目なんですよ。歌を歌う人や楽器を弾く人の心が大切なんです。千尋ちゃんや蒼井君にはそれがあったから」

千尋は由香里の言葉を聞いて、「そっか」と頷いた。納得出来たような出来なかったような、変な感じだった。

このやり取りの後、少し間が空いてしまったので、千尋は慌てて口を開いた。

「2人とも、もう下に降りてるかもね。あ、由香里さんありがとう。英語が分かったの初めてかも」

由香里はふふふ、と笑った。

リビングに降りると、思いのほかそこに秀太と卓也の姿は無かった。

「へえええー！卓也まだ頑張ってるんだ！？奇跡だね！」

千尋が驚くと、母も、

「そうなのよー。明日熱でも出るんじゃないかしら」

と真面目な顔でそう言った。由香里はそんな2人の会話を聞いて「ヒドいですよ」と苦笑していた。

結局2人が降りてきたのは、それから15分後だった。即ち卓也は1時間キッチン机に向かって勉強したということになる。

リビングのドアを開けた卓也は、フルマラソンでも走って来たかのように疲労していた。

「あ、姉ちゃん、早いね」

「う、うん。卓也……がんばったね」

茶化そうと思っていた千尋だったが、卓也の疲れ切ったその顔には、劳いの言葉をかける他になかった。

30分程したらまた1時間勉強することになっているのだが、大丈夫だろうか。

卓也は千尋の横、ソファの端っこに倒れ込むように座った。

一方秀太はと言うと、そんな卓也とは正反対にピンピンしていた。

「中学の勉強は教えられるか不安だったけど、何とかなったよ。

理科がちょうど物理分野で助かった」

そう言って卓也とは逆の端っこ、由香里の隣の位置に腰かける。

「まだ頭の中で数字がぐるぐる回ってる……」

隣で卓也が唸っている。秀太はどんな教え方なんだろうかと、次に控える千尋が少し不安になる。

「それとさ……姉ちゃん……」

卓也が秀太の方をチラッと見て、口ごもる。秀太は由香里と話をしている。

「なに？」

千尋が尋ねると、卓也が小さな声でポツリ、と言った。

「俺……変態じゃないよなあ……」

楽しそうにおしゃべりをしている秀太のほうをひとつ眺めた後、

千尋は弟に向かって優しく声をかける。

「大丈夫。ヘンなのはあっちだから」

そんな失礼な言葉に気がつきもせず、秀太は向こうで笑っていた。

別に聞かれてても大丈夫、千尋にはそんな思いがあった。

学生の本業(3)

次は千尋がその「ヘンなの」に教えてもらう番だ。

卓也は休憩している間、ずっと「もう疲れた」と連呼していたが、由香里に声をかけられると、大人しく後に付いて行った。

千尋も秀太と共に自室に向かう。扉を開けて、家族以外の異性を自分の部屋に入れるのはこれが初めてだな、と乙女チックな考えが頭に浮かびかかるが、自分と大して変わらない体格の秀太を見てそんなものはすぐに消え去る。

千尋は勉強が基本的に得意ではないが、中でも数学は特に苦手であり、何より嫌いだった。

だいたい、四則演算位ならともかく、今回のテスト範囲の『ベクトル』なんて知っていて何の役に立つのだろうと、

物理学を学ぶ秀太の前ではとても言えたものじゃない不満を、常日頃心に抱いていた。

「数学の先生は去年と同じ？」

その質問が、全く予想していなかった角度からのものだったので、返事が少し遅れた。

「え？ あ、うん。一緒一緒」

「問題用紙とか、とってあったりする？」

「あー、えーっと……」

もれなく捨てていた。返答に詰まる千尋に、秀太は苦笑いをして話を続ける。

「……なるほどなるほど。たぶん、学校の定期テストだったら指定の問題集とか教科書の章末問題からちよつといじった程度の問題だと思うから、最悪丸覚えで何とかなるはず。だけどまあ好きじゃない物は覚えにくいから、今日は理解した上で覚えられるように頑張らましよう」

「数学も暗記でいけるもんなの？」

千尋には疑問だった。第一、これまで単純な記憶で乗り越えられなかったからこそ、数学というものに散々苦しめられてきたのだ。

「うん、まあ。日本史とかみたいな暗記とは少し違うけどね。意外と数学も記憶が武器になるもんだよ。解き方のパターンを覚えるの」

「パターン？」

「そうそう。『こういう問題はこうやって解く！』っていう解き方のパターン。応用問題だって結局は複数の基本問題のパターンが混ざってるだけだし。まあパターンだけで難しい問題が全部解けるわけじゃないけど、少なくとも学校の試験の問題だったら大丈夫」

「ふーん……」

あまり信じられない話だ。そもそも、頭の造りが秀太とは違うのだから。不信の色を浮かべる千尋を尻目に、秀太はほとんど先へと進む。

「それじゃ、覚えていこう。もちろん、ちゃんと理解した上でね」
普段通りの愛らしい顔から発せられた言葉を聞き、先ほどの疲れ果てた弟の姿を思い出した。何だか嫌な予感がある。

「う、うん。ゆっくりね。ゆっくり」

リビングに戻ると、先に終えて由香里と緊張しながら会話をしていた卓也が安心と同情に満ちた顔で迎えてくれた。

「千尋、あんたも頑張ったわねえ」

夕飯の支度をする母が台所から言う。

「うん……まあ、ね」

返事をしながらソファに倒れこんだ。頭が痛い。頭を突つつく千尋を見て「筋肉痛じゃない？」と言った卓也を叩いた後、ひとつ深呼吸をする。疲れ切った脳に酸素が気持ちいい。卓也はさっき程は疲れていないようだった。

「お疲れ様でした」

由香里が労いをくれる。「ありがとう」と何とかお礼の言葉を口から絞り出した。

本当に疲れた。普段減多に使わない脳みその、理解する部分と記憶する部分を同時に、しかも嫌いな数学に使ったこの1時間、千尋は体力と気力を大いに消耗した。心なしか、少し痩せたような気さえる。千尋の前に卓也にも教えていたはずの秀太が、どうしてあんなにピンピンしているのか理解できない。

「2人とも、少しは解ったの？」

家事を終えた母もリビングにやってきた。

「もちろん」

卓也が先に答える。遅れて千尋も「大丈夫」と小さく返す。

「本当に今日はありがとうございました」

母は今度は秀太と由香里に向って深々とお礼をした。2人が返事を返す前に母の言葉は長々と続き、普段マイペースな2人もさすがに少し困惑していた。

「お母さん、2人とも困ってるから」

そんな様子を見かねて千尋が割って入る。

「あら、御免なさいね。ホントに年をとると話が長くなっていけないわ……。お茶でも飲んで、ゆっくりして下さいね。ほら、千尋母に促され「はい」と腰を上げる。

「そんな、お構いなく」と遠慮していた秀太だったが、その後母が持ってきたケーキを見ると誰よりも1番に顔を輝かせた。

縁

「良い子達ね」

台所で洗い物をしながら母が言う。

ソファ―に座って卓也と一緒にテレビを観ていた千尋は、その声に「ん？」と振り返った。

「蒼井君と大江さん」

「あ、うん。すごく良い人達でしょ。ねえ、卓也」
向かいに座る卓也に同意を求めて千尋は想う。

彼らは本当に優しい。他人とコミュニケーションをとるのが極端に苦手な千尋でも、2人に対してならまるで家族の様に安心して接することができる。

それを可能にしているのは、彼らの優しく温厚な人柄だ。彼らのおかげで、千尋は楽しい時間が過ごせる。

けれども、2人の気持ちはどうなのだろう？ 秀太や由香里は、自分と一緒に居て、話をして、本当に楽しいと思えているのだろうか？ 彼らと出逢った時から生まれ、その後はずっと心の奥へ奥へと隠し込んでいたひとつの疑問が、その扉を開けて千尋の頭に流れ込む。今まで生じたことさえ気がつかないふりをしていたその疑問。もしかしたら2人は……。

「……ちょっと姉ちゃん、聞いてる？」

卓也の声で、目の前に広がる光景がリビングへと戻る。『ああ、危ない所だった』と千尋は秘かに胸を撫で下ろした。

「ごめん、なんかボーっとしてた。何？」

「何って、姉ちゃんから話を振ってきたんじゃない。今日の2人の

事だよ」

「ああ、そうだったね」と呟くように返事をした千尋の様子が気にかかったのか、卓也の声のトーンがさっきまでと少し変わった。

「2人とも、優しかったよ。あんなに続けて勉強出来たことなんて今までなかったし。蒼井さんは……最初見たとき驚いたけど」

「うん」

千尋がうなずく。その後少し間があった後、卓也が思い切ったように口を開いた。

「……姉ちゃん、なんかあった？」

「え？ いや、何にもないよ。ちよつと考え事してただけ」

「ふーん」

それっきり、再びリビングにはテレビと流し台を流れる水の音だけになった。テレビはコマースシャルに入り、連続ドラマでよく見かける若手俳優が新商品のお菓子を手に微笑んでいる。

この沈黙を破ったのは千尋だった。

「2人は……」

「え？」

「2人は私と居て、楽しいのかなあ……なんて」

「はあ？」

思いがけない千尋の言葉に驚いた卓也が、思いがけない大きな声を出して千尋が驚く。

「楽しくなかったら毎週毎週休みの日に朝からわざわざ出掛けて一緒に会う訳ないじゃんか。蒼井さんとは平日だって会ってるみたいだし。それに大江さんも言ってたぜ、姉ちゃんには感謝してるって」

「……うん」

千尋のつれない反応に業を煮やした卓也は絨毯の上に寝っ転がって言った。

「そんなくだらないこと考えてるヒマがあったら、もう1時間勉強した方がいいんじゃないの？ 解き方のパターン」

「あ、やっぱり卓也もそうやって教わったんだ！今日はもうイヤ、お終い」

笑い声がようやく聞けて満足したのか、卓也はそれっきり肘枕に頭を置いたままテレビに向かい、何も言ってはこなかった。

洗い物を終えた母がソファアーに着く。さっきまで卓也が座っていた場所ではなく、千尋の隣の位置に腰を下ろした。

「あの子達と付き合いだしてから、千尋少し変わったわよ」

「変わった？私が？」

「ええ。最初大学生と遊ぶなんて母さん内心反対してたけど、あんたどんどん表情が明るくなっていったから。高校に入ってあまり楽しそうじゃなくて、心配してたのよ？何も言わなかったけど。それでずっと、どんな子たちか気になって、今日会ってみて納得したわ。本当に良い子達だった。縁は授かりものなんだから、大切になさいよ。そうすれば、向こうだって大切にしてくれるんだから。逆にいえばそうならない縁なんて神様は寄越さないわ。神様は千尋に蒼井君や大江さんを選んだのと同じように、2人に対して他の誰でもなく千尋を選んだのよ」

母の言葉に「分かった」とひとつ返事をして、この気まずさから逃れようと、真ん前にある机に目をやると、ホワイトカラーの携帯電話のLEDライトが点灯していた。赤色の光はメール着信の合図。千尋はそれを手に取って開いた。届いたメールは2件。

『今日は試験勉強お疲れ様でした。来週はテスト頑張ってください。テストが終わったら、卓也君も誘って4人でお疲れ様パーティーしましょうね。次回の練習楽しみにしています』

『こんばんは。蒼井です。今日はお疲れ様。中間試験も頑張つて。弟君にも伝えておいてください。来週中もたぶん木村さんのところで練習しているから、解らない所があったら何時でも訊きに來てく

ださい』

弟の言うとおり、『くだらないこと』を考えているばかりで、思えば礼のメールも送っていなかった自分を恥じ、千尋は未だ雫が伝わる指で携帯電話のボタンを押し始めた。

昼休み

学校で過ごす1日の中で、1番嫌なのが昼休みだ。

授業の終わりを告げるチャイムと共に、周りのクラスメイトはそれぞれ仲の良いグループで集まり、みんなで仲良くお弁当を食べ始める。

教室の至るところで机が並び変えられる中、いつも千尋はぽつんと独り、自分の机で弁当に向かい、黙々と箸を動かす。

別に誰かが自分を見ている訳でないことは分かっているが、クラスメイトの視線にはつい敏感になる。寂しい事より、寂しそうだと思われる事の方が辛かった。

だから千尋は毎回急いで弁当を食べた後、すぐに図書室に向かう。これが千尋の悲しい日課だ。大して興味のない本を読みながら、時間が過ぎるのをひたすら待ち続ける。

壁に掛ったあの時計を、この1年の間にどのくらいの時間見つめてきたのだろう。

いがらしあきら
五十嵐彰は昼休みが始まるとすぐに教室を抜け出して、いつもどこかへと姿を消す。そして千尋が教室に戻る頃には、きちんと窓際の席に座り、やっぱり不機嫌そうな顔をしてチャイムが鳴るのを待っている。

彼女が普段どこで昼休みの時間を過ごしているのか千尋は知らない。見かけることは無いから、少なくとも図書室ではない。

そんな彼女の真似をする訳ではないが、この日千尋は昼休みどこか別の場所で弁当を食べてみようかと朝から考えていた。

新しいクラスになって2ヶ月近くが経ち、クラス内のグループもほぼ固定化されてきたからだ。

4時間目の古典の授業が終わると、千尋は机の横に掛けてあるカバンから弁当箱を取り出し、予定通りそつと教室を出た。

行く当てが全くないわけではない。何しろ朝からずつとちようどいい場所を検討していたのだ。その候補は2か所あった。

ひとつは廊下を少し歩いてすぐに出られ、中庭やグラウンドに繋がるやや広めの2階に造られたテラス。

そこにはうまい具合に階段があるのでちゃんと座って食べることができるし、何よりどの教室の窓からも目に入らない。

しかし、いざ着いてみると、そこで食べるのには少々問題があった。千尋がテラスに出て辺りを見回すと、そこでは複数のカップルが幸せそうに肩を並べて座り、食事をしながらおしゃべりをしていたのだ。

とてもじゃないが、こんな中独りで弁当を食べる勇氣は無い。千尋は気づかれぬよう、こっそり廊下へと引き返した。

ふたつ目の候補は屋上。本来立ち入り禁止の場所なので、さっきのようにカップルで溢れていることはなさそうだが、その点では別の不安があった。

小説や漫画によって作られた、現実味を帯びない空虚なものに過ぎないが、学校の屋上といえば『不良達のたまり場』というイメージがある。

そしてこの学校にも『不良』と呼ばれる様な生徒が少なからずいる

ことは千尋も知っていた。

千尋はそんな想いに内心ドキドキしながら4階から屋上へと続く階段を上り、その先にある重い扉をそっと開けた。そうして作ったわずかな隙間から片目だけで外の様子を慎重に窺う。もしもそこに複数の生徒がいたなら、すぐに退散するつもりだ。

しかし千尋の目に映ったのは人気ひとけの全くない屋上と、その先に広がる校庭の風景だけだった。抱えていた不安から解放され、肩の力がすっと抜ける。千尋は安心して扉を押し開け屋上に出た。

小学校や中学校の頃も含めて、学校の屋上に出るのは初めてだった。外から吹いてくる強い風が顔にあたって心地いい。更に足を一步二歩と進めてフェンス越しまで辿り着き、そこから外を眺める。

4階建てのこの学校の屋上から望める校庭や街の風景は、いつも3階の教室の窓から見ているものとは少し違った。グラウンドは一層小さく、青空に浮かぶ雲は一段と近くに見えた。

首を曲げて真上に空を見上げると、名前も知らない鳥が1羽飛んでいる。それを見て千尋は羨ましく思った。

単独でいることが当然で、集団に憧れることも、集団から馬鹿にされたり憐みの目で見られることもなく、自由に空を飛びまわって……。

「いいなあ……」

自分でも気がつかないほど自然に声が出た。だから突然後ろから声をかけられたのには、千尋は思わず飛び上がりそうになった。

「なにがだ？」

驚いて振り返り目をやると、そこには不機嫌そうな顔をしたあのクラスメイトが立っていた。

微熱

千尋の目の前には五十嵐彰の姿があった。
高い身長と、いつもの不機嫌そうな顔が威圧感を与える。

今までどうして彼女に気がつかなかったのだろうと、頭をめぐらしていると、視線の更に先で彼女のものと思われるスクールバックが目に入った。

屋上と校内を繋ぐ階段室を裏に回ったところに、それは無造作に置かれていた。

不覚だった。

突如現れたのは彼女ではなく千尋の方だったのだ。千尋は背後にまで気をまわさなかった自分を責めた。

「独り言？ 何しに來たの？」

彼女は千尋の無言を、先の問いかけを聞き取れなかったものと判断したようで、質問を繰り返した。

その口調は決して友好的なものではなく、むしろ千尋を警戒し、責めるような敵対心が感じ取られる。

この屋上をあたかも自分の所有地のように言う彼女に少し反感を抱いたが、それを口に出せる千尋ではない。

「あっ……えっと……」

極度の緊張と、彼女の出す高圧的なオーラで頭の中が真っ白になる。手のひらに汗がにじんだ。動悸は激しくなり、言葉を上手く発することができない。

パニックになった頭の片隅で、もう1人の千尋が冷たくひとつ、溜

息をつく。「またか」と。

「……どうかした？」

彼女は再び問いかける。

「なんでもない。お弁当を食べに來ただけだから」そんな簡単な言葉が喉の奥につつかえたまま、どうしても口から外へ出せない。

そのまま何も言えずにただモジモジしている千尋を見て、その後彼女は諦めたように溜息をつき、後ろに向き直って言った。

「言いたいことは、はっきりしろよな。あたしウジウジしてる奴、大嫌いだ」

その言葉が耳に入った瞬間、目に見えない何かが千尋の心臓を掴んで強く握りしめた。胸が苦しい、息が出来ない。

心の奥で生まれた鋭く尖った微熱が数秒かけて全身に巡り、千尋は無言のまま階段室に向かって駆け出した。

母が作った弁当が大きく上下に揺れる。それでも構わない。一刻も早く千尋はこの場から消え去りたかった。

後ろを向いたままの彼女を追い越していった時、頬を涙が伝った。

千尋はそれを気付かれないように下を向いて走る。直後、背後で「おい！」という声が聞こえたが、千尋は無視して扉を開け階段室に駆け込んだ。

涙を拭いながら階段を降りる中、もう1人の千尋が繰り返す。

「悪いのはお前だ」「みんなに嫌われて当然」「お前は本当に駄目な奴だ」

今は自分に対してさえ、否定することができなかった。

自答

結局昼食をとらないまま午後を迎えたのにも関わらず、終始空腹どころか一切の食欲を感じなかった。

どうして自分はみんなと同じように会話が上手にできないのだろうか。

クラスメイトの大半が机に顔を伏せ、眠っている7限目の家庭科の授業中、

千尋はその問いの答えを探すように過去の記憶の中を巡っていた。

小学校までは多少の人見知りはあったものの、特別問題はなかった。

互いの家で楽しく遊ぶ友人だって沢山いた。同級生であれば、自分から相手に声をかけるのも苦にならなかった。

しかし中学校に上がってからだ。人と接することが妙に苦手になった。

それは他人^{ひと}からどう見られているのかが気になり始めたからだ、当時自分で思っていた。ただ漠然と、これが思春期なのだろう、と。だからもう少し時間が経てば、そんな時期も抜け出して、以前の様に容易に初対面の人とも話せるようになるはずだと。

けれどもそんな期待とは裏腹に、学年が上がるにつれ、千尋はますます他人とのコミュニケーションが苦手になっていった。

初めて顔を合わせるような相手とはもちろん、同じ小学校から上がってきた顔見知りとさえ、次第に会話を恐れるようになった。

結局中学校生活が終わる頃には、千尋が校内で交流を持っていたのは予てからの友人数名になっていた。

コミュニケーションや会話、人間そのものに対して恐怖を抱いていたわけではない。

千尋が恐れていたのは、何よりそのようなことを通じて、傷つき傷つけられることだった。

そして、そうなるきっかけが中学時代の部活動中のひとつの出来事にあることを、千尋は知っていた。――千尋は問題の答えを、知って知らない振りをしていた。

夕焼けがかった帰り道、千尋は母の作った弁当のことを考えていた。一口も手をつけていない理由を、どう繕うか。

体の具合が悪かったことにしようか、それとも何か集会があったとかで食べる時間が無かったとか……いや、それならその集会も考えないと――そんな言い訳を考えているうちに、再び涙が溢れそうになった。

母はどんな気持ちで毎朝弁当を作っているのだろう。自分の娘が、いつもそれを独りで食べることや、ましてわざわざ人目につかない場所を探しているなんて、想像すらしていないだろう。

申し訳ない想いで胸がいっぱいだった。せめて今から、どこか公園にでも寄って食べてしまおうか、そう考えて肩を落とす。駄目だ。まだ、何も口にする気が起きない。

夕日が照らされて光る電線を見上げ、屋上でのあのやり取りを思い返す。

――悪いのは、自分だ。訊かれたことにちゃんと答えられなかった自分が、彼女を呆れさせ、更には怒らせてしまった。

だからそれで自分が傷つくのは、自業自得なのだ。千尋はそう、何
度も心に言い聞かせる。

それでも……。

「嫌いだ」

彼女に言われたあの言葉が、どうしても頭から離れない。

幼い日々の友達同士の喧嘩を除けば、女子という性質上、千尋はこ
れまで誰かに直接そのように言われたことは無かった。

一時期あまりに無視が酷い時があり、その時は「面と向かって悪口
を言われた方がまだマシだ」なんて思っていた。

だが、いざ言われてみると、それは間違いだったと千尋は思う。
直接否定される方がよっぽど辛い。

道に落ちていた小石を右足で蹴る。蹴られた小石は思ったよりも
遠くまで飛び、転がった先で排水溝の中に落ちた。

千尋はわざわざ遠回りをして、商店街へ続く道を選んだ。

足取りを重たくさせているのは、うしろめたいという思いだろう。

これは……甘えだ。弁当を食べないで母に合わせる顔がないという、
甘え。――そして何より、「誰か」にこの気持ちを慰めてもらいた
いという甘え。

もちろんそのことを千尋は知っていたし、その「誰か」が誰である
かも分かっていた。

これは甘えなのだ。非難されるべき甘え。自己責任の欠如。

しかし、それを承知の上で千尋はこの道を選んだ。

今後、このことで誰かに責められても構わない。今、この今、誰か
に頼らなければ心が折れてしまいそうだった。

木村楽器店のガラス扉の前まで来て、足を止める。

この場所で、こんなにも緊張しているのはあの日以来だと、千尋は
ひとり、ふっと笑った。

年下の少女に見えたのが、待ち合わせ相手の男子大学生だったあの日。

そんな失礼な勘違いにも笑って応えてくれた彼は、おそらく今回も笑って迎えてくれるだろう。

そしてこの日あったことを全て話したなら、彼はきっと慰めてくれるはずだ。

――だけど、それではいけない。彼の優しさに付け込んで、利用して、頼りきって……彼を困らせるわけにはいかない。

普段通りに彼と接して、普段通りに練習して、普段通りに帰る。

そしてその中でこっそりと元気をもらえればいい。

だから決して、彼の前で弱音は吐かない。

千尋はそう心に決めて、重いガラス扉に手を伸ばした。

制服

こんにちは、と千尋は努めて明るく木村楽器店の中に入った。

「ん？ ああ、千尋ちゃんか」

店の奥に並んだ、大きな棚に向かって楽譜を並べていた木村は、振り向きざまに「いらっしやい」と続けようとして目を丸める。どうやら制服姿で店にやってきた千尋に驚いているようだった。

千尋は普段、休日はもちろんのこと、平日に木村楽器店を訪れるときも、一旦家に帰って私服に着替えてから来店する。

わざわざそうしていたのは、母に外出を伝えるためというのもあったが、

何よりも千尋にとって高校の制服は孤独に身を置く服装であり、それは即ちひとりぼっちの象徴のようなものだったからだ。

そしてこの場所には、そのような悲しい気持ちを持ち込みたくないという思いがあった。

「珍しいね、制服で来るなんて」

「うんまあ、たまにはね。ええっと……秀太は今日来てますか？」

そうやって店の時計に目をやると、17時を少し過ぎたところ。いつもの彼ならもう入店している時間だ。

「蒼井君？ うん来てる来てる。今日も下で練習してるよ」

「良かった。それじゃあ、私もスタジオお借りしますね」

「どうぞどうぞ」という木村の了解を得て、千尋は店の奥にある階段を下り、地下にある小さなスタジオへ向かった。

防音の為、分厚く造られた扉の前に立ち、一つ深呼吸をする。

そして、絶対に悲しい顔は見せない、ともう一度強く心に誓う。

いつも通りに会話をして、練習して、気が紛れれば、元気を分けてもらえばそれでいい。

間違っても、慰めなんかを期待して、悲劇のヒロインを演じてしまっただけじゃない。

この扉越しでは声かけは全く意味は成さないため、千尋はその代わりにトントンと、2つノックをした。

しかしその後数秒待っても反応は無く、もう一度今度は大きめにノックをしようと右手を振りあげた時、ガチャンと目の前の扉が開いた。

直後、隙間から除いた顔と目が合い、千尋は慌てて右手を下ろす。

「はあい……ってあれ？　千尋？　わー、今日は思いっきり女子高生だねー」

そう言って秀太は部屋の中から千尋の格好をまじまじと見つめた。女性の様な外見をした秀太とはいえ、男の人に体をそう凝視されるのはさすがに恥ずかしく、千尋は慌てて彼を押してスタジオ内へと入った。

「平日に会うのは久しぶりだね。制服だし、なんかあったの？」

パイプ椅子に座って冗談っぽく言う秀太の言葉に、千尋は内心ドキリとした。しかし、表情には出さない。平静を装って返事をする。

「うん。別に何にもないけど。今日はなんか、一旦家に戻るのが面倒くさかっただけ」

「そっか」秀太はそう言ってギターを手に取りジャラーンと音を鳴らす。

今のはCメジャーのコード。千尋でさえ押え方を知っている、最も基本的なコードで、秀太はよく無意識に、このコードを鳴らす癖があった。

秀太はその後、千尋の手にカバンを見つけると

「お母さんにはちゃんと行ってある？」

と尋ねた。「何を？」とは訊かなくても解る。家に帰らずに木村楽器店に寄ることを、だ。

「うん。メールしといたから」

嘘だ。本当は弁当のことが気にかかって、母とは連絡を取れずにいた。

しかし秀太はその言葉を疑うことなく、満足そうにうなずくと

「それじゃあ、今日も6時位までは練習出来るね。すぐに練習に入る？ それとも学校終わったばかりだから、ちょっと寛いでからにする？」

と言い、またひとつゆっくりと弦を弾いた。今度はAマイナーというコードだった。

「私は大丈夫。あんまり疲れてないし。さっきまではどの曲練習してたの？」

「んーと、最初は『キセキ』のアレンジを考えてたんだけど、途中から飽きて、さっきまでは『どんなときも。』を楽しく1人で歌いながら弾いてたよ」

「なにさ、それ」と、千尋は笑って返した。

「たまには僕も歌いたいんだよ」

「歌ったらいいのに」

秀太はピックを持った右手を頬に寄せ、少しの間考えた格好をした後で

「いや、それは事故になるから」

と答えた。それを聞いて吹き出す千尋を見て、秀太は不満そうに続ける。

「本当に笑い事じゃないんだから。小学校の時はともかく、中学高校は文化祭で合唱コンクールがあるから、めちゃくちゃ大変だったんだよ。ちゃんと練習に参加してたのに、いつも女子に怒られてさ。『男子ちゃんと歌って！ 蒼井君はちゃんと音を聞いて！』ってまさかの怒られ方だね。運動もできないから、学園祭シーズンは本当に肩身が狭かった」

気の強い委員長タイプの女の子に苛められている秀太の姿が簡単に想像できる。

「でもまあ、大変だったけど、今思えば音痴も悪くなかったね」

首を傾げる千尋を見て、秀太は笑顔で言った。

「こんなに優しいボーカルと出会えたから」

いつもの柔らかい口調で発せられたその言葉が、嬉しかった。嬉しくて、嬉しくて、涙が零こぼれた。

そしてその涙は、千尋の胸の中にある、もうひとつの異なる感情のブレーキを割った。

なにかが溢れる、音がした。

慟哭

一度溢れてしまった感情は止められなかった。

落ちていく物体の速さがその落下距離に比例するように、

心の奥へ奥へと隠し込んでいた感情は、そこから這い出て表に出た時、反動としてより一層強いものとなっていた。

胸が、熱い。

その熱を必死に身体の外へ放出するように、大粒の涙が止めどなく溢れる。

両手で拭っても拭っても、涙は次々と頬を伝い、零れ落ちた。

どうして自分はこのことをしているのだろうか？

どうして自分は大切な人をこんなにも困らせてしまっているのだろうか？

そんな自己抑制の想いも、かえって涙を助長した。

防音設備の整った地下の一室。

千尋のむせび泣く音だけが、この空間を満たしている。

目の前で跪いたまま立ち上がれない千尋の姿に、秀太も戸惑いを隠せずにいた。

「千尋……？ どうしたの……？ 何か僕、悪いこと、を？」

秀太は手にしていたギターを椅子の上に残し、千尋のもとに駆け寄って、その両肩に優しく手を置いた。

そんな彼に、千尋は止まらない嗚咽の中で辛うじて言葉を返す。

「――ううん、違う、違うよ。秀太は何にも悪くなんかない。悪い

のは私。全部、私なの。今日だって……あの時だって」

「今日？ あの時……？」

千尋の言葉が指し示すことを全く理解できないといった様子の秀太はさらに困惑していた。

「千尋、とりあえず落ち着こう？ 一度落ち着いて、話を最初から聞かせてよ」

秀太の小さな手が、千尋の肩と背中であたたかかった。しかし、それでも涙は止まらない。

「何で……何で私は、ちゃんとヒトと話をすることができないんだろう……」

千尋の口から弱々しく発せられた言葉に、秀太はなだめるように囁く。

「そんな、さっきだって僕と一緒に話をしたじゃないか」

「それは……」千尋は俯いていた顔を秀太の方に向けた。

「それは、秀太がすごいから！ 私じゃない！」

「千尋……」

秀太は悲しそうな顔をしていた。

今まで千尋が見たこともないような悲しそうな顔。耐えきれず、千尋は秀太の手をそっと払った。

「どうして？」千尋は再び視線を落とし、地面を両手について叫ぶように繰り返した。

「どうして？ どうしてだろ……？ どうしてみんなにはできて、私にだけはできないんだろう！？ 私だって……私が嫌！」

身体が震えた。怒りと悲しみが入り混じった、千尋自身にも解ることのできない複雑な感情で。

「私はただ！」

秀太は黙って千尋の悲鳴を聞いていた。

「――誰も傷つけない、だけなのに……」

光明

どれほどの時間、泣いただろう。

大人になっていく過程の中、声をあげずに泣くことにすっかり慣れ切ってしまったことを、

全身を襲う倦怠感が教えてくれた。

「落ち着いた？」

スタジオの静寂を破る柔らかい声。

千尋はその声の主の顔を見ることができなかった。

「……うん」

暫しの沈黙。

千尋が我を忘れて泣き喚いている間も、秀太は部屋を出ることなく、すぐそばで膝をついたまま見守っていてくれた。

そんな彼には、申し訳なさど恥ずかしさで合わせる顔が無い。

俯いたまま、地面をただじっと見つめている千尋の耳に、「ガタン」とパイプ椅子が動く音が聞こえた。

秀太が座ったのだろう。

続けて、「ふう……」という小さなため息の音。

恐かった。

秀太は先の醜い姿をみて、どんな思いでいるのだろう。

悲しかった。

彼の心が自分から離れていくことを考えると。

それでも、弁解の言葉は何も浮かばない。いや、そもそも弁解などしようがない。

「千尋が」

沈黙を破る秀太の言葉に、体がひとつ大きく震える。出来るものなら耳を塞いでしまいたかった。

「千尋が人見知りだってことは知ってるよ。最初に君が教えてくれたからね」

「……」

「千尋はそれを、駄目なこととか、自分の悪いところみたいに感じてるようだけど、僕はそうは思わない。それは、相手のことをすぐちゃんと考えられる証拠でもあるから。僕は千尋のそんな優しい所が好きだよ。でも……」

勇気を出して顔を上げる。秀太はいつもの優しい表情をしていた。

「周りの誰も傷つけちゃいけないからって、代わりに君だけが傷つくのは違う。だから、君だけがそんなにも辛い思いをする必要はないんだ。僕は千尋になら、傷つけられたって構わない。そんなことで君から遠ざかるような軽い気持ちで一緒にいるわけじゃない」

秀太はにこりと微笑んだ。

「だから、安心して思いっきり僕を頼ってくれたらいい。人見知りで、初対面に苦労したり辛いことがあったりしたら僕に話してくれたい。何があっても変わらない味方がいると思ってくれていい。それに……」

「あまり大きな声では言えないけれど、何もこの世界の全ての人と仲良くする必要はないんだから、その人と合わないと思ったら逃げちゃえばいいんだよ」

そう言って、秀太はパイプ椅子から立ち上がった。

ゆっくりと、一步一步千尋のもとに歩み寄る。

そんな彼が目の前にやってくるまで、千尋は彼をじっと見つめ続けた。

「君が君を嫌いと言うのなら、僕が2倍君を好きでいる。君の分まで君を好きになる。だから、ほら」

目の前に差し伸べられる小さな手。

千尋にとって、それはまるで暗闇を切り裂くひとつの灯のように思えた。

上か下かもわからない真っ暗な世界を、浮かび上がらせる優しい光。必死に逃げようとする暗がりまでも、明るく照らすその光に向かって千尋は懸命に右手を伸ばす。

そして――しっかりとつかまった。

その暖かい手に体重を預けて千尋は立ち上がろうとした。

しかし、その手の主は片手では重さに耐えきれず、ふらっと体がよろめき、

「うそ!？」と慌てて助太刀の左手を出す。

そうして何とか千尋を引っ張り上げた秀太は、照れたように頬を緩めて言った。

「これだから、小さいのはイヤなんだよ」

それを聞いて千尋も答える。

「いいよ、私が痩せるから」

思わず笑ってしまった後、もしこれがわざとだったら本当に彼はすごい人だと千尋はふと考えたが、

目の前で本気でへこんでいる様子を見て、流石にそれはなさそうだ
と思い直した。

それでもやっぱり――

「あ、笑った！」

秀太は、千尋にとっての光だ。

メンバー表

まさか、こんなことになってしまうとは。

ボロボロのテニスラケットを片手に、千尋は頭を抱えた。

あれから一夜が過ぎ、窓際の様子を窺いながら教室に入った今朝のホームルームでのこと。

千尋のクラスの担任で、数学を教える40代半ばの三浦先生は、教壇に立つと2枚の紙を取り出し、この日開口一番に言った。

「再来週の球技大会のメンバー表、提出期限は今週中だけど、3・4組は今日午後に体育の授業があるから、そのとき練習ができるように昼休みまでに決めといてくれってさ」

その言葉で途端に教室内がざわめきだす。

「何にするー?」「あたしバスケがいい!」「俺は今年もバレーに出るから」「お前はどすんの?」

あちらこちらでそんな会話が始まり、終止がつかない。たまらず三浦先生は大きな声で制止する。

「おい、静かに!　まだホームルームは終わってないぞ」

千尋の通う高校では、球技大会が年に2度ほど行われる。

その内の1回が今月中旬に予定されているのだ。

どうしてこんなにジメジメして、天候に恵まれる機会も少ない6月

に球技大会があるのか、千尋にはわからない。
恐らく、教師陣のカリキュラムの都合なのだろう。

ちなみに千尋は昨年2回ともドッチボールに参加した。

けれども別に、自分から特別この種目を希望したわけではない。むしろドッチボールは、スポーツが割と得意な千尋だが、どちらかと言えば苦手とする競技だった。

たまたまクラスの編成上、女子種目であるドッチボールにクラスが出場しようと思ったら、どうしても1人空きができてしまうのだ。いわば、千尋は人数合わせだった。

苦手といっても、周りは全員女子だったし、技術の問題は運動神経である程度カバーできたので、千尋は特別問題なく無事に過去2度の球技大会を終えられた。

なお、ここで言う問題とはチームの足を引っ張ることで、千尋が何より恐れていたことだった。

だから千尋は今年も適当に空いた種目に人数合わせ要員として参加するつもりでいた。

クラスが出場する競技は、希望者の人数を見て、体育委員や学級委員が決めてくれる。

それらの中で、ギリギリ参加人数が足りない種目を選んだらいい。そう思って、千尋はクラスメイト達が全員教室後ろのホワイトボードに名前を書き終えるのを、昼休みまで待ち続けた。

「あの、神崎さん」

その昼休み、突然話かけてきたのは永野という名前の、口も聞いたことのない男子だった。

坊主頭をみて、そういえば4月の自己紹介の時野球部に所属していると言っていたのをぼんやりと思い出す。

「え？」

そんな彼が自分に何の用だろうかと、千尋は疑問符調に返事を返すと、彼は思いもよらない言葉を投げかけてきた。

「球技大会のことなんだけど、神崎さんと五十嵐さんでソフトテニスに出てくれないかな？ 男女共同種目で女子は大変だけど、あとひと組だけ足りないんだ」

「ええ！？」

思わず大きな声が出てしまった。永野はそれに驚き、慌てて続ける。

「い、いや、テニス苦手だったら駄目でいいんだ。俺たちも卓球にまわるから。でもさ、女子種目はもうみんな埋まっちゃってるから……まあ、バスケットバレーを解体すればドッチボールにちょうど人数が合うんだけどさ……」

テニスは苦手ではない。何なら球技の中で一番得意と言っていい。千尋は中学校の3年間ソフトテニス部に所属し、校内ではエースだったのだから。

だけど……今の千尋にとっては出来れば避けたい競技だった。更にその上、ペアの相手があの五十嵐彰なのだ。

しかし、そんな自分のわがままでクラスメイトに迷惑をかけるわけにはいかない。

そもそも悪いのは自己主張することなく、ただ待ち続けることを

選んだ自分だ。

千尋は腹を決めた。

「う、うん、大丈夫。分かった。私もテニスに出る」

「ホント！？　ありがとう！　五十嵐さんには俺から言うておくから」

そう言うのと、永野は窓際の彼女の席に向かって行った。

彼女がこの話を聞いてどんな反応をするのか見るのが怖くて、千尋は後ろのホワイトボードに名前を書いたため立ち上がる。

ソフトテニスに五十嵐彰。千尋にとって、考えられる限り最悪の組み合わせだった。

ふたたび

体育の授業は昼休み後の5時間目。

更衣室で着替えた後、グラウンドで男女に分かれてそれぞれ出欠確認と準備体操、簡単な説明を受けて球技大会の練習に入る。

千尋も指示された通りに、先生の後を追ってグラウンド片隅の器具庫にラケットを取りに向かった。

同行しているのが男子ばかりなのを見ると、どうやら3組のソフトテニス出場メンバーは全員男子らしい。

男女が共に参加できる種目の場合、女子に比べ男子が出た方が絶対的に有利なため、勝ちを狙いに行くなら当然の成り行きだろう。

先頭の千尋に対して最後尾でゆっくりと付いてきているのが彰だ。身長の高い彼女がこうしてジャージを着ていると、周りがみんな男子だということもあって、中性的な男の子のように見える。

発しているオーラが威圧的なのも、その要因のひとつに違いないと千尋は思う。

先生が器具庫を開け、安物のテニスラケットがいくつも無造作に突っ込まれた大きな箱を取り出した。

ソフトテニスを3年間続けた千尋からすると、もう少し丁寧に保管してもいいものなのだと思うが、不特定多数の生徒に使われるのだから仕方がないといえば仕方がない。

あれだこれだといつまでも選り好みしている男子たちを尻目に、千尋はこの程度のラケットなら、どれを選んでも同じだろうと近くにあった1本を抜きとり、一足先にテニスコートに向かった。

自転車置き場から校舎及びグラウンドへと続く長い階段を半分降りたところにテニスコートは位置する。

千尋が着くとそこには既に先生がいて、ソフトテニス部の部庫の前にはボールの沢山入った籠が置いてあった。

「あれ？　ひとりか？　他の奴らは？」

「多分、まだラケット選んでます」

「そっか、しょうがねえな。どれ選んでも大して変わるもんじゃないのに。それじゃ、先生はソフトボールの方を観に行くから、最初に言った通りちゃんと時計を見てチャイムが鳴る5分前には切り上げてこいよ。次の授業があるから、ボールは籠に入れたままでいいぞ」

「分かりました」

先生が立ち去った後、千尋は籠の中からボールをひとつ手にとって握った。懐かしい感触だ。その後、それを上に放りあげてラケットで受け止める。ラケットリフティング。ポンポン、と心地いい弾性音が静かなテニスコートの中を響き渡る。次に地面に向かってラケットでボールを付き、そのまま一番奥のコートに向かった。それにしても……。最後にボールを手の中に収め、思わず千尋は頭を抱える。まさかこんなことになるとは……。

『その人と合わないと思ったら、逃げちゃえばいいんだよ』

秀太の言葉が頭の中に響く。

「逃げられなかったよ……秀太」

千尋はポツリと呟いた。

次にコートに入ってきたのが彰だった。こっちに向かってくる彰に対して何もしないのもかえって陰悪だと思って、千尋はラケットを持った手を小さく振って見せる。

そこでひとつ笑顔でも見せてくれたならば、千尋の緊張感も随分和らぐのだろうが、そんな柔な相手ではない。現実の前にあるのはいつもの不機嫌そうな顔のままだ。

「あいつら、まだラケット選んでやがる」

千尋のもとにやってきて、第一声。千尋は前日のことを思い出し、慌てて返事をする。

「そ、そうなんだ」

「そんな変わるもんかー？ 道具ひとつで」

「もちろん変ると言えば変わるけど、上にあったラケットのレベルだったらみんな同じ様なもんだよ」

その言葉に、彰は素早く反応をした。

「詳しいのか？」

「あ、いや……。中学校の時ソフトテニス部だったから」

「ふーん。今は、違うんだよな。球技大会出れるってことは」

「うん。部活は何にもやってないよ」

「そっかそっか。元テニス部か。それじゃあ、ひとまず安心だな。あたし、1回もテニスやったことないから」

「多分……大丈夫だと思う。テニスはそんなに難しくないから」

「おいおいホントかよ。っていうか何を基準に難しくねーんだよ」

そう言って、彰は笑った。始めてみる彼女の笑顔に、千尋は思わず見入ってしまった。

彰はそれに気付くと、思いのほか困ったようにたじろいた。

「な、なによ？」

「い、いや別に」

怒られると思っていた千尋も彼女の意外な反応に、つられるように戸惑ってしまう。

「つか、あいつらマジで遅すぎるだろ！」

コート内の沈黙を破る突然の大声に、千尋の心臓が飛び跳ねた。やっぱり、まだ怖い。

ホームラン

永野をはじめとする男子たち一行はラケットを抱えてその後すぐにやってきた。

彰のイライラが爆発寸前で何とかおさまって千尋は胸をなでおろす。

ソフトテニスに出場するのは各クラスからそれぞれ3ペアで、体育の授業は2クラス合同で行われるため、今コート内には6ペアの計12人がいる。千尋と彰を除いた10人はみんな男子で、2年4組からは千尋と彰、永野の他に、永野と同じく野球部で背の高い谷岡、声が大きくクラスの中でも目立つタイプの林と小柄で眼鏡をかけた青木という名前のクラスメイトが出場する。3組のメンバーは知らない顔ばかりだ。

千尋の通うこの高校は軟式硬式共にテニス部が県内でもそれなりの強豪校ということもあり、テニスコートは綺麗に整備され、更に8面もあった。

そのため12人全員が不自由なく同時に練習することができ、彼らに言われるがまま一先ず2ペアずつに分かれて打ち合ってみるようになった。

千尋と彰の相手は、永野と谷岡の坊主頭ペアだ。

入り口から一番離れたところのコートに4人集まり確認をする。最初千尋が手にしていたボールはコートの隅に転がしておいた。

「俺らテニスやったことないし、とりあえずアウトとかそういうル

ールは関係無しでやってみよう」

仕切り役は永野。彼の言葉に3人が肯き、コートを分断するネット越しに向かい合う形でそれぞれ2人ずつに分かれた。

すぐ横に目をやると、隣のコートでは林と青木の2人が3組のメンバーとわいわい騒ぎながら既に練習を始めている。

漫画やアニメを観て覚えたのであろうと思われるウイニングショットの名前を叫びながら一心不乱にラケットを振り回す彼らの様子は、とても高校生とは思えない。しかも必殺技と名乗っている割には、至って平凡なラリーだ。しかしその平凡なラリーも、それなりに続いているのを見ると彼らは全くの素人という訳ではないのかもしれない。

そんなことを考えながらとぼとぼベースラインまで下がったところで彰が千尋に話しかけてきた。

「ねえ、ポジションみたいなの、どうすんの？」

「ええっと、最初は前衛とか後衛は気にせずに、2人ともこのラインの辺に立って、自分の方に来たボールを打ったらいいと思うよ」

「そっか。まあ、任せるわ」

「うん」と返事をした千尋は、まだ運動を始めていないのにも関わらず大きく脈打っている心臓を落ち着かせようと必死に努めていた。隣のコートは相変わらず「必殺!」「秘技!」などとやたら五月蠅い。

「それじゃー始めるよー」

千尋の対角線上にいる永野がアンダーサーブでボールを寄越す。

未経験者と言っていた彼がサーブに技名を付けなかったことはもちろん、オーバーヘッドを選択しなかったことに一先ず安心して千尋はゆっくりとフォアハンドで谷岡の方向に打ち返した。

ボールは緩やかな放物線を描き、谷岡の手前でワンバウンド。我ながらかなり打ち易い所に返せたと自己満足する。

あのスピードであのコースなら初心者でも簡単に、更に言えば彰の方向に打てるだろうと千尋が安心したのも束の間。谷岡が打ったボールは千尋の頭上を高く越え、背後のフェンスが大きな音を立てた。ホームラン。谷岡の隣では永野が笑っている。

「あ、悪い……」

「いいよいいよ」

そう言っただけ千尋はボールを拾い上げ、彰に投げ渡した。

「はい、五十嵐さん」

受け取った彰は、「え？」と目を丸め、面食らったようだった。

「あたし!？」

「あ、うん……。まだ打ってないから」

ビビらないビビらない。千尋は自分に強くそう言い聞かせながら彰に答える。

「下からこうやって打てば大丈夫」

千尋が目の前で素振りをして見せるが、彰はボールを左手で握っ

たまま動かない。よく見ると顔が少し強張っている。

「乱打だから、失敗してもいいし、気楽に打ったらいいよ」

「あ、ああ……」

彰は小さくそう呟いてゆっくりとラケットを大きく振りかぶった。
あ、まずいかもしれない。

千尋がそう思った次の瞬間、今度は向こう側のフェンスが大きく鳴った。2者連続ホームラン。

その後先程本塁打を打った谷岡がボールを拾いに行くのが見えた。

握手

その後も彰と谷岡は長打を連発、猛打賞を記録した。

それでも初心者にありがちな空振りがほとんどないのは、2人とも目や勘が良いからなのだろう。

暴走球の度に谷岡は謝り、それを毎回千尋と永野で慰めていたが、それでも回を重ねるごとに彼は明らかに沈んでいった。

一方その永野はと言うと、最初の方にホームランを2回ほど打ったものの2人に比べればかなり安定している。フォアハンドのみならず、有る程度慣れが必要なバックハンドでまでコート内にボールを打ちこんでくる彼には千尋も正直驚いた。

しかし、それ以上に意外だったのが彰の反応だ。

上手くいかないことに苛立って彼女が不機嫌になってしまいうのではないかと、当初から千尋は内心気が気でなかったが、その心配とは裏腹に彰も谷岡と同様ボールを吹っ飛ばしてはその都度小さな声で「ごめん」と謝り、相変わらない険しい表情からは読み取りにくいものの、確かに少なからず落ち込んでいるようだった。

「あーっ！　くそっ、まただ！」

今度も谷岡の打った球が千尋の頭上を飛んでいく。

千尋は「気にしないで」という風にラケットを持っていない左手を上げて見せ、ボールを拾いに行った。

「何回もごめんよ……。あゝあ、思ってたよりかなり難しいなあ。全然上手く打てない」

「タニはヒットを狙うから駄目なんだって、俺みたいに内野安打で

稼ぐ気持ちでやってみ」

永野のよくわからないアドバイスを背中で聞きながら、千尋はラケットですくい上げたボールを左手に移した。それを掌の上で転がしたまま、心の中である葛藤と対峙する。

——どうしよう。言わなくちゃ。でも踏ん切りがつかない。だつてちゃんと言えるかわかんない。……怖い。

ひとり1回の発言が義務付けられた、中学校の人権学習の授業中なかなか手を上げられなかったあの時と、同じだ。

学年が上がって、新しいクラスの新しい席に座って、周りの新しい顔ぶれに自分から話しかけようと思っても結局話しかけられない、あの時と。

けれどもそれらは何時だって、いざ口に出してしまえばなんてことないことなのだ。

他人は自分が思っているほど、自分に興味はない。自分がどれほど流暢に話そうが、反対に何度も口ごもってしまうのが、彼らの人生においてそんなことは何の意味もなさない。他人の失敗など、1週間も経てば記憶のゴミ箱に捨てられてそれでお終いだ。

しかし、そんな頭での理解に身体はいつも置き去りにされる。本当に笑ってしまうくらい、行動に移せない。

今だって、やっぱりそうだ。ボールを握った左手が震えた。

「……神崎？」

彰の声に名前を呼ばれ、ふっと我にかえる。

「どうした？　気分でも悪いか？」

「ううん、大丈夫。なんともない」

「そうか？　でも顔色悪いぞ？」

本気で体調を気遣ってくれる彰に驚きと感謝の念を込めて、千尋は笑顔で答えて見せた。

「ホントに大丈夫だよ。ありがとう」

「そう……それならいいんだけど」

一瞬ひるんだその隙を、千尋は見逃さなかった。言い出すのなら、今しかない。
優しく微笑む女顔の大学生の姿を心に思い浮かべて、千尋は遂に口火を切った。

「あ、あの、五十嵐さん。ちょっとここに……」

そう言われ顔にはてなマークを浮かべたままの彰を連れて千尋はネット際まで歩き、今度は彰と同じように不思議そうな顔をして立っている2人の男子の名前を呼んだ。

「永野君、谷岡君、ちょっと……」

「ん？　どうかした？」

呼ばれて駆け寄ってくる2人を見て一安心した後、続いて背の高い谷岡に声をかける。

「ええっと、谷岡君、ラケット1回貸して」

「ラケット？ はい」

谷岡はグリップの方を千尋に向けて言われたとおりにラケットを差し出した。

谷岡からラケットを受け取った千尋は、そのまま先程の彼と同じようにヘッド側を自分の方に、グリップ側を谷岡の方に向けた。

「右手で、このラケットと握手する感じで握ってみて」

再び言われるがまま、谷岡はおずおずとラケットを握る。そんなに緊張されると、こちらまでますます緊張してしまうのでやめて欲しい。

「これが、基本の持ち方だから」

「え？ あ、うん」

目を丸くする谷岡と永野に、彰が代わって説明をした。

「元テニス部だったさ」

その言葉を聞いて、2人は大きな声を上げる。

「ウソ！？ マジで！？」

「へー！？ だから上手だったのか」

2人の大げさなリアクションに、千尋は慌てて口を開く。変な期待を持たれても大変だ。

「いや、でもあれだよ？　そんなに上手い訳じゃ……」

「まあ第一、ペアのあたしが素人だしね」

思わぬ助け船がありがたい。

「それでも経験者がいるのはデカいなー。俺らルールすらよく分かんないもん」

「あっちの2人も？」

千尋は相変わらず技の名前が飛び交う隣のコートに目線移した。

「林と青木？　ああ、あの2人もやったこと無いって言ってた」

「そ、そうなんだ」

漫画やアニメの知識も捨てたものじゃないかもしれない。

千尋はそんな雑念を捨て、次に彰に対しても同様のやりとりをした。差し出されたラケットのグリップに、彰は少し困ったようにも見える表情でゆっくりと手を伸ばす。

「そう、そのまま普通に握手するみたいに」

「あ、ああ」

ラケットをしっかりと握った彰は、その後俯き気味に小さな声で「サンキュ」と呟いた。

その言葉を聞いて、電源を入れたばかりの炬燵の温もりのように、暖かさを伴う嬉しさが千尋の胸にゆっくりとこみ上げてきた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6775u/>

三つ葉のクローバー

2011年11月30日22時46分発行